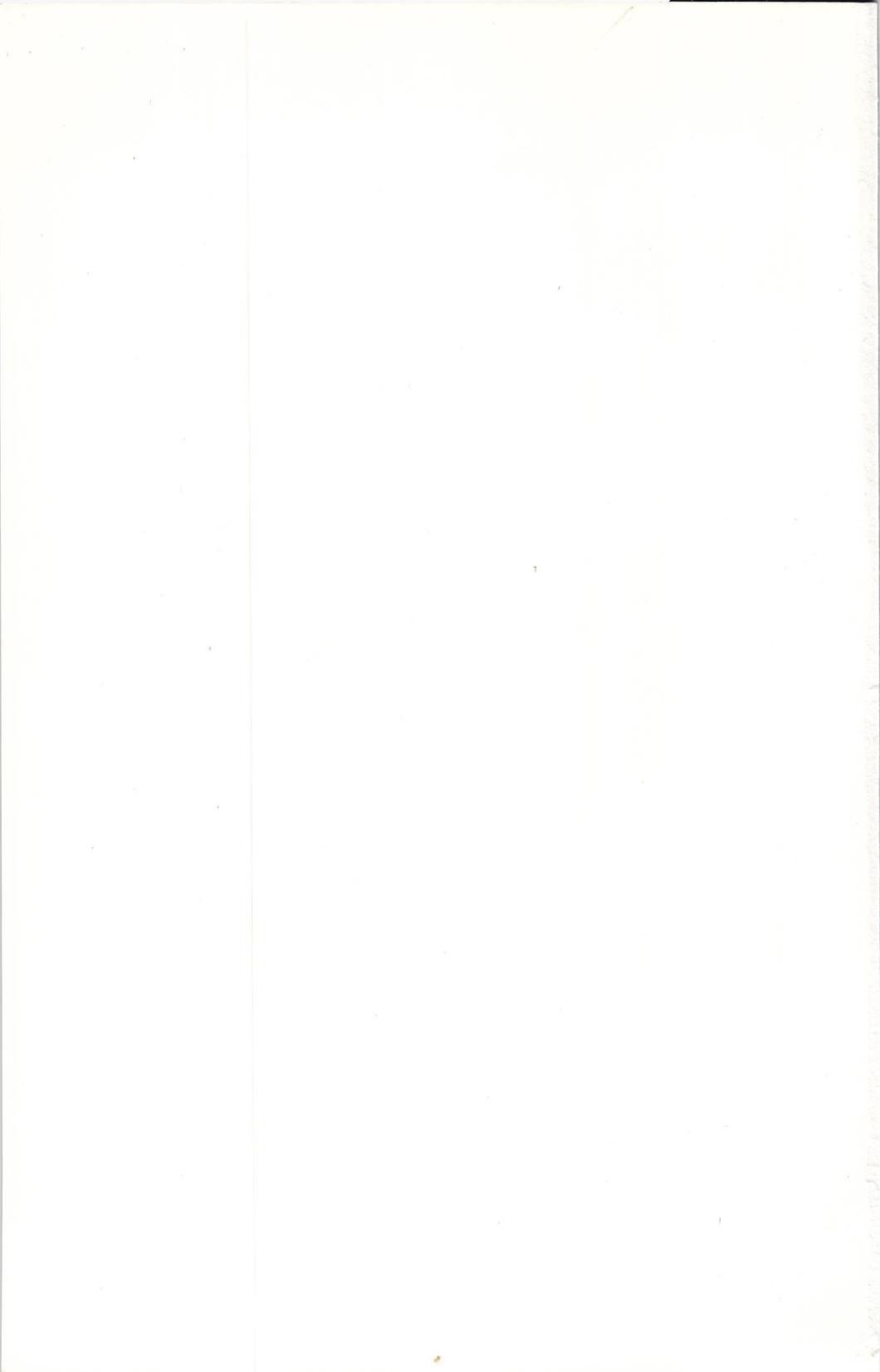


ロータリーへの私の道

ポール
ハリス

PAUL HARRIS
SELECTIONS FROM
MY ROAD TO ROTARY





抜 粹

ロータリーへの私の道

ポール ハリス



Rotary International

Evanston New Delhi São Paulo
Stockholm Sydney Tokyo Zurich

第2版への序

『ロータリーへの私の道』(抄録)の第2版は、ポール・P・ハリスの自伝ですが、1962年に出版された第1版とは内容が少々異なっています。というのは、第2版には、ロータリーの創立者ハリスが自分の少年時代のことを書いている最初の部分が、抜粋されて入れられたからです。この第2版の刊行を国際ロータリー理事会が認めたのは、ポールが、バーモント州ウォリングフォードの父方の祖父の農場で過ごした少年期のことを、少しでも知っていたほうが、彼の人となりを理解しやすいと考えたからです。事実、この部分を読めば、勤勉で優しくあった祖父母に教えこまれた美德と、この小さなニューイングランドの田舎町で学んだ価値観とが、この若者の世界観をつくり上げるのに大いに関係があったことを、読者も感じられることでしょう。彼の少年時代が、ロータリーという運動自体をつくり上げてゆくのに、重要な力になったことはたしかなのです。

ロータリーは1905年にシカゴで誕生したのですが、その理由のひとつは、彼自身がしばしばいっているように、若い弁護士ハリスが、小さな町のもつ親しさを、際限もなく広がる、荒っぽい、当時のシカゴのなかに、もう一度、つくり上げようとしたからです。

1905年といえば、世界は当時、どんな状態にあったでしょうか。20世紀に入ってからは、いつもそうだったといえますが、そのころ

も急激な変化の時代でした。世界を広く見渡すと、当時は、日本がロシアを破った戦争で、一大海軍国であることを証明したところでしたし、ノルウェーはスウェーデンから分離しました。セオドア・ルーズベルトがホワイトハウスにがんばっており、レーニンはヨーロッパでの追放生活からロシアに戻って、やがて革命を起こすことになります。スイスでは、アルバート・アインシュタインという若い物理学者が、相対性理論に関する短い論文を発表しました。これは、永遠に人間の宇宙観を変えたわけですが、一方、シグムント・フロイトという名のオーストリアの医学者は、人間が人間自身をみる見方を変えつつあったのです。ピカソはこの年にスペインからパリに移って、華やかな時期が始まり、また、ジョージ・バーナード・ショーの劇『パーバラ少佐』が、ロンドンのローヤル・コート劇場で上演の幕をあけたところでした。

若さに満ちたシカゴの町においても、たいへんな変化のときでした。市になったのは1887年ですが、その前の1871年には、中心部の商業地区を含む4平方マイルが大火事で全焼し、9万人が家を失っていたのです。ところが、それからわずか22年後には、このシカゴが懸命にがんばって、ニューヨーク、フィラデルフィア、ワシントン抜いて、アメリカ発見400年を祝うコロンビア万国博覧会の開催都市になったのです。

ロータリーが誕生した前後のシカゴは、人口の爆発的増加、とどまるところを知らない工業の発展、そしてひどい労働不安の時代でした。ロータリー誕生の11年前には、全国をゆきぶった寝台車従業員組合のストがシカゴで起こりましたが、結局、この騒ぎは、グローバー・クリーブランド大統領がイリノイ州知事の希望を無視して

連邦軍2,000名をシカゴに派遣することによって、おさまったのです。また、ロータリーが生まれた翌年には、アプトン・シンクレアが、シカゴの家畜置場ストック・ヤードのおそろしい労働条件を暴露して古典となった小説『ジャングル』を公刊しています。

しかし、前途に希望をもてるような明るい傾向もみえていました。ロータリー誕生の13年前には、シカゴ大学が開設され、また、最初のロータリー・クラブが結成された4年後には、現代建築の巨匠の多くが世に出ました。この新しい大学の近くにフランク・ロイド・ライトがロビー・ハウスを建てていました。またその前には、世界最初の摩天楼が下町に建ち、また、ジェーン・アダムズはハル・ハウスを開いていました。ハル・ハウスは、最初のセツルメント・ハウスと考えられるもので、この町の貧しい人たちを実にいろいろなやり方で助けたところでもあります。

ポール・ハリスが、1940年代に出した『ロータリーへの私の道』の第33章で書いているとおり、「ロータリーが、もっと明るい空の下で、もっと寒暖の差の少ない気候のところ、そして、精神的にも落ち着いた都市で、生まれる可能性もあったのではないか、ということは考えられることですが、しかし一方では、ロータリーのような運動が誕生するためには、50年前に市民の正義を求めるすさまじい戦いが行われた、この逆説的なシカゴこそ、もっともふさわしい場所ではなかったのか、と主張する人もたくさんいるのです」

シカゴこそ、まさにふさわしい場所でした。そして、ポール・ハリスこそ、まさにその人でした。彼の伝記のこの抜粋は、ロータリーの運動とその創始者を、一層よく理解する助けになりましょう。

目 次

少年時代	1
放浪生活の5年間	13
弁護士事務所の看板を掲げる	25
最初のロータリー・クラブ	33
広がり始めたロータリー	43
ロータリーの設計者と施工者	52
二度の大戦とロータリーの奉仕	67
チェスタートン氏に感謝しよう!	78
「カムリー・バンク」	93

少年時代

いまからずっと昔の、ある夏の夜のことでした。父と、5歳になった兄のセシルと、それより二つ年下であった私の3人は、バーモント州ウォリングフォードで、汽車をおりました。私が初めて会った、ひとりの背の高い男がふりかざす提灯の光がチラチラする以外は真っ暗でした。このときの様子は、私の記憶の敏感なフィルムに、はっきりと深く刻みこまれているので、生きているかぎり、私はそれを忘れることはないと思います。

その背の高い男は、私の小さな握りこぶしを、温かい、強い手で包んでくれましたが、その手は、父の手よりもはるかに大きく、指がとても長いので、私たち小さい子供は、道の悪いところを通るときは、それにぶらさがって歩くのに便利でした。それで、このときも、私たちが先頭を歩き、父と兄が後からついて来ました。この背の高い男が私の祖父だったのです。私たちは肅々と歩いてゆきましたが、こわいほど静かな、暗い夜のやみが、私たちを一層厳粛な気分にしました。

祖父と父とセシルと私は、最初の角を北へまがり、道路を横切ったところで、祖父が門をあけ、私たちは庭に入りました。住み心地の良さそうに見える家の、横のベランダに近づくと、戸があいて、

石油ランプを頭の上にかざした黒い目の年配の婦人が、一歩外に出て、暗やみのなかをじーっとのぞきました。この女性は父の母親でしたが、今後は、同時に、私の母親にもなってくれるはずの人でした。

その夏の晩、祖母は、自分の息子とそのふたりの子供を、心をこめて、しかし静かに迎えました。私たちは食堂に集まりましたが、祖母と父とは、いろいろな用件を話し合っていました。私は話の中味などは、まったく気にしませんでした。70年という年月の間にゆっくりと立ちこめてきた霧を通して、このときのふたりの姿を、今でもはっきりと見ることができます……。

ほんとうのところ、祖母は自分の息子、すなわち私の父親を窮地に追いこんでいたのもめごと、その結果として、彼女がぶつかってしまったいろいろな問題で、心がいっぱいだったのです。

父とセシルと私の3人が、父方の祖父母の、早寝早起きといった静かな生活を、どうしてこのようにかき乱すことになったのか、また、若いほうの家族の大切なひとり、すなわち私の母がどうしてこの場にいなかったのか、この点は説明しなければなりません。関心をもって下さる方のために申し上げますと、要するに私たちの家族は経済的なことを考えて、二つに分かれたのです。別の言葉でいえば私の父は西部での事業に失敗して、私たち男の子を連れて、このバーモント州ウォリングフォードという田舎町にある父方の家をおくれがとして避難してきたのです。財政的に追いつめられたときには、世の父親たちはこういうことをよくやりましたし、また今でも、よくやっているようです。妹のニーナ・メイはまだ赤ん坊でしたから、こちらへ来ると祖父母に負担がかかり過ぎると、母は考えたの

です。母は、私たちが生まれたミシガン湖に面したウィスコンシン州の美しい小さな町ラシーンで、そのまま、できるだけがんばってやっつけてゆくほうをとったのでした。母はブライアン家の出ですが、ブライアン家の人たちは、みんな誇り高い人たちだったのです。

● 儉約を旨とするニューイングランド〔アメリカ北東部のボストンを中心とする地方。17世紀にイギリスから渡った清教徒によって開かれた。バーモント州はこの地方の最北部の一州〕出身者である祖父は、父に1軒のドラッグ・ストアと住宅を1戸与えたのですが、息子に対するこの甘やかしがひとつの原因となって、父の仕事はうまくいかなくなったのでした。ひとつ大きな援助を受けたからには、困ればきっとまた次々に援助してもらえると、父は考えてしまったのです。しばらくは援助があったものの、やがて祖父は、父の事業をやめさせて新しい店を自分の家の近くに設け、複式帳簿のつけ方にくわしいもの——祖父自身——がしばしば帳簿を点検できるようにすることが必要だと考えました。祖父の帳簿は常に収支が合っていて、赤字で記入する項目は決してなかったのです。

● 当時、大人たちは気がつかなかったのですが、先に述べた出来事は、父のドラッグ・ストアを閉鎖したことさえも含めて、私たち子供たちにはすべて都合よかったです。セシルは、一時的なものながらこの恩恵をありがたく思うことになりましたし、私は私で、すべてにバランスがとれていて、最高の理想を掲げるとともに、教育を至上の目的とする、きちんとした、永続性をもった家庭の恩恵を受けるようになったからです……。

● 祖父の家はそう広くはありませんでしたが、食器室と何でもしまっておくための地下室と、大きな屋根裏部屋を別として、部屋数は14もありました。そのうちいつも使われていた部屋は七つでした。

客間は四つありましたが、そのうち二つはめったに使われることがなく、四つめは、私の知っているかぎりでは、一度も使われたことはありませんでした。

私たちの家には、家政がうまく行われているという証拠がいたるところに表われていました。テーブルクロスの種類は、いつも一点の汚れもなく、きれいでしたし、人の目に触れるところにも、あちこち、きちんと縫いつけられたつぎが当たっていました。これは、ニューイングランドの人びとの特色である、儉約を重んずる心と愛情のこもった入念さを暗黙のうちに示すものでした……。

祖母の台所仕事は、時計仕掛けのようで、自動車のエンジンか、人間の心臓みたいでした。この台所で、家全体の家事をコントロールする力が発電されていたわけで、台所はまさに勤勉の蓄積所でした。

台所はあらゆる役を果たしていました。パン焼き日にはパン屋としての機能が発揮され、バターづくりの日には酪農所になり、ソーセージづくりの日には、ラードをとったり肉を塩漬けしたり、肉屋の店になりました。このほかにも、果物の缶詰づくりや、バスマットづくり等々、ありとあらゆる雑多な仕事、この台所で行われていました。

バーモントの農夫たちは、自分の家の近くに運よく泉がわいてくると、そこに小さな小屋を建て、そのなかで酪農作業をやって、製品を自家用に、あるいは（十分の量がたまったときには）販売用に、貯蔵したものです。バターや卵は、取引先の店で売るか、場合によっては必要な品と物々交換されました。新鮮なクリームやバターの香りのする涼しい泉の小屋は、旧式の農家ではいちばん気持ちのよ

い場所であり、夏などこの小屋に一步入ると、ひやりとしてとても元気が出たものです。

祖母は、セシルと私をよく教会につれていってくれましたが、古い組合教会の、きちんとした、きれいな内部をよく覚えています。レースでへりをとった、くすんだ色の絹のガウンを着た祖母の姿は、ニューイングランドの安息日には本当に似つかわしいものでした。教会のなかに入ると、町の人たちは男も女も子供も、広い通路を静かに歩いて、目立たないようにそーっと桝席に入り、色のあせたクッションのついた座席に腰を下ろして、牧師さんが何を言われるか、合唱隊が何を歌い出すか、じっと待っているか、あるいは長い冥想にふけったり、またときには、居眠りをしたり……していました。

祖母の服は、いつもその日に似合っていました。彼女の黒いガウンと、それにつけた二、三の簡素なアクセサリーは、とくに日曜日の朝に似つかわしいものでした。この祖母の衣装は、祖父の日曜日の晴れ着やオーバーコート（いわば彼の「日曜集会用」）と同じように、長い間着てきたものです。祖母がペイズリー織りのショールを持っていませんでしたかって？ もちろん持っていました。メル叔母さんも持っていましたし、それを買う余裕のある主人をもった女性は、みんな持っていました。ペイズリー織りのショールは上流階級のしるしだったので。

私たちのように山のなかに住んでいると、当然山登りを得意とすることになります。ウォリングフォードから近いホワイト・ロックスという山と、ラットランドから遠くないキリントン・ピークという山が、登ってみようかという気を起こさせました。この二つの山に登ったという経験が、後年ロッキー山脈で、もっと大きな登山を

やろうという元気を出させたのです。

ホワイト・ロックス登山は、上にそびえる切りたった崖から、嵐や霜や、おそらくは地震などでくずれ落ちたごろごろ石の上を歩くことで始まります。そして、この石の道が終わったところから、急峻な山腹にかかります。アルプスの登山家からすれば、口にする価値もないほどの山ですが、初心者にとっては、やはり登山は登山でした。これを企てた人は、ほんの少ししか知りませんが、私にとっては、どうしてもやらなければならないことのひとつだったのです。私自身は、ホワイト・ロックスに初めて登ったときのほうが、何年かあとでロッキー山脈中のパイクス・ピーク（コロラド州の高山。4,301メートル）という高い山に登ったときよりも、ずっと多くの満足を感じたと思っています。

もうひとつ、私が登りたかった理由は、私の住む谷間をいちばん高いところから眺めたかったからです。夏季には、ホワイト・ロックスの頂上からでも、村の家並みは木の葉にかくれて見えませんでしたし、蛇行する川も、ちらっとしか見えませんでした。しかし村の向こうには、ウエスト・マウンテンのふもとに接して、フォックス・ポンドという池が輝いて見えていました。この水泳のできる池は、夏の暑い午後、樹々の間から初めてちらっと見えたときなど、早く行きたくてたまらなくなったものでした。誰か悪い仲間が「いちばんビリは……」と叫んでいる。それをきいて、私たちはいっせいにかけ出し、走りながら服を脱いで、蛙のよう^{かえる}にそろって水に飛びこむのでした。楽しい楽しい日々でした。

ウォリングフォードにも、娯楽というものは、それなりにありました……。

会場が三つもある、大きなサーカスがラットランドにかかる日が近づくと、ウォリングフォードの腕白たちは、ケチケチと金をため、使い走りに精を出し、乾し草づくりでも何でも、仕事があるところならどこへでも行って働いたものです。そうすれば確実にお金がたまって、ラットランドまでの汽車賃と大テントの座席の予約のほか、大道芸人の見物料、アイスクリームとピーナッツとポップコーン、その他急に出てくる思わぬ出費などを、なんとか賄うことができたのです。

サーカスが終わったあくる日のウォリングフォードは、まるでしぼんだ風船のようでした。そして事実、私たちの小さな町が、再び地面に足がつくようになるには数日間かかったものでした。しかもそのあとになっても、裏庭には平行棒が立ち、空中ブランコが木の枝を飾ったり、乾し草置場が闘技場に化したりして、背中を引っ張ったり、ときには骨を折ってしまうような設備があちこちにできたものです。

ラットランドで開かれるカウンティ・フェア〔郡の特定の町で開かれる農産物、家畜の展示市、見世物、その他催し物もあつてもお祭りのようになる〕も、周囲の^{カウンティ}郡からのお客もたくさん引きつける、なかなかの騒ぎでしたが、今でもそうでしょう。いろいろな催しが、スポーツ好きの人たちに望みどおりのスリルを与えてくれました。郡に住む人が、自分の所有する^{トロット}速歩馬に自分で乗ってする競走や、野球の試合、町ごとの消防手のチームが引くホース車の競走などもありました。

例によって例のごとき見世物や、手回しオルガンや風船揚げ、楽隊や太鼓たたきなどでお互いに競いあい、格好のよいラップ隊長は女ごころをドキドキさせたものです。

しかし、ラットランド・カウンティー・フェアは、その趣旨どおり農産物の展示が主たるものでした。そこではお百姓たちが、登録された馬や牛、羊や豚の最優良種の展示を見て回るのです。みごとなりんごや、なし、かぼちゃやチーズ（おいしいグリーンチーズと普通のバーモント・チーズ）などもならべられていました。

ウォリングフォード高校での課程を終えたあと、私はさらに上の学校へ進学しようという心づもりでいました。祖父は私の志望に賛成で、財政的な援助についてもたいへん乗り気でした。このように私を信頼して援助してやろうということになったのについて、祖父が私のなかにそれに値するものを、はたしてどの程度みたのでしょうか。私にはわかりません。今から振り返ってみると、祖父に期待されるほどのものは私にはなかったと思うのですが……。

こういう祖父母の考えが正しかったのかどうか、年月がたつにつれて、ますますきびしい評価にさらされてゆくことになります。ブラック・リバー・アカデミー、バーモント陸軍予備校、バーモント大学、プリンストン大学での私の成績は、とても不十分なものでした。当時の、昔ながらのカリキュラムは、私にはほとんど意味のないものでした。文学、哲学、歴史、などの人文諸科学や社会科学が大きな意味をもっていたことは間違いありませんが、ほんとのところ、私がかつとも得るところがあったのは、課外活動、それもとくに不服従や規則無視のからんだ課外活動だったのでした。

その年の冬は、東部や北部では、記録破りの寒さのきびしいひと冬で、その記録はその後も破られていません。雪は軒端まで積もり、鉄道は数日間とまってしまいました。食糧を蓄えていなかった人たちは、たちまち食べるものに不足しましたが、祖父の家では、そん

な心配はありませんでした。19世紀のアメリカの詩人ホイットィアの書いた物語詩『雪ごもり』^{スノウ・バウンド}どころの話ではなく、この詩を空想による誇張だと思っていた人たちは、その考えを改めねばなりません。その年、門から玄関までや、門の前のレンガの歩道の雪をかくのに祖父は実によく働きました。しかし、それが彼の力に負えなくなったことを、誰よりもいちばんよく知っていたのは祖父自身でした。吹雪が来ると、祖父は、さあ来い、といつも身構えるのでした。彼はスポーツ好きのたちだったので、隣近所の誰にも負けまいとするのでした。年寄りも若い人も、ほとんどの村の人たちが、起きてからやらねばならない仕事を考えてはいるものの、まだベッドから出ない夜明け前に、祖父が歩道の雪をかき寄せている音が聞こえてくるのが常だったのでした。

祖父の雪カキは私にとっては一種のシンボルでした——勇気と決意のシンボルでした。もし私の家が紋章をつけることになったら、それは雪カキの紋でなければならないと思います——それも伏せた雪カキではなくて、いつでも使えるように立てかけた雪カキでないといけません。祖父は自分の雪カキが横になったままでいることを、決して許さなかったからです。

私が家に帰ってすぐに聞いたところでは、祖父は朝、家に戻ったとき、ひどい風邪にとりつかれていたらしく、しかもその日のうちにどんどん悪くなっていったということです。いつもの時間にベッドに入り、夜はずっと寝られたのですが、朝、決まった時間に目が覚めなかったのです。祖母は、祖父が苦しそうに呼吸しているのに気がつきました。60年以上に及ぶ結婚生活で初めて祖母は自分で起きて灯りをつけ、手伝いの女の子を呼びました。彼女は、台所のス

トーブをゆすって、燃えかすを落とし、火を起こし始めました……。

かかりつけの医者でもあるジョージ叔父は、事態を察して、大急ぎでかけつけてきました。家に入って外套がいでうを脱ぎ、オーバーシューズを外してから、祖母にひとこと挨拶し、まっすぐに祖父の部屋に入って熱心に診察しました。

少したってから、叔父は祖母のほうを向いて、次のように言いました。「少々、肺炎を起こしているようです。しかし、身体が頑健だからなんとかもってくれればと思うのですが……。様子をみることにしましょう。おそらく今晚が峠でしょうね」

その日遅く、叔父は父や母やその他、近親のものに電報を打ちました。父と母はとるものもとりあえず、かけつけて来ました。手近に親切な隣人や親類がいるということは実にありがたいことです。そういう人たちの同情や助言がなかったら、祖母はどうやって耐えぬくことができたでしょうか。60年というもの、祖父と祖母は文字どおり一体であった——二人が違う考えを抱いたことは一度もなかったのです——という事実を考えれば、正直に言って、祖母は驚くほどよくやったと思います。

祖父の呼吸は苦しそうではなくなりましたが、ずっと弱くなりました。ジョージ叔父はもう希望をもっていませんでした。臨終が近づいていました。祖父は二度と意識を回復することはありませんでしたが、彼の年とった疲れた心臓が、ただ鼓動をとめたといったほうがよいのかもしれませんが。良き夫であり、父であり、祖父であった、ひとりのニューイングランドの真の市民が世を去ったということです。

祖父が亡くなったあと、私はプリンストンでの1年を終え、祖母

のもとで夏を過ごすために家に戻りました。予想されたことかもしれませんが、祖母はときどきもの思いに沈んでいました。ほんとうに淋しいのだということは私にもわかりました……。

祖母はめったに祖父のことを口にしませんでしたが、いつも祖父のことを考えていることが言葉のはしはしにうかがわれました。一度、私たちふたりが果樹園のなかの道を歩いていたとき、祖母は祖父のことを口に出して言いました。私が覚えているおよそのところでは、祖母の言葉は次のようなものでした。

「ポール、私はときどき思うのだけれど、おじいさんにとってあなたがどんなに大切な人だったか、あなたわかっている？ 以前にはね、おじいさんとしては、自分の一生は失敗の生涯だと思うしかないときもあったのよ。あなたも知っているとおおり、おじいさんはあなたのお父さんに高い望みをかけていらしたの。お父さんの教育には、ずいぶんお金もかけたから、それがうまくいかなかったときには、それこそがっくりきてしまわれたのよ。そこへ、神様のみ心のようにあなたが生まれたでしょ。おじいさんは、すべての望みをあなたにかけたわけよ。ポール、あなたはおじいさんを裏切ってはいけないわ。一生懸命に勉強して、おじいさんのために立派に生きてちょうだいよ」

西の空の、急速に消えていく夕焼けのほうをもう一度じっと見つめたあとで、祖母はまた歩き出しました。私は何か、じんとした気分になって、あとについて家のほうへ戻っていったのです。

このなつかしい家を出て、1年と1カ月たったころ、そのとき私はアイオワ大学の法学部の学生になっていましたが、私はジョージ叔父から、祖母の魂が夜の空へ飛び去ったという電報を受け取りま

した。祖母の最後が近いことを示すような徴候は何ひとつなかったのです。祖母はただ、眠りについて、そのまま覚めなかったのです。

私は葬儀には帰りませんでした。父と母のほか、家族のものが列席しました。当日の『ラットランド・ヘラルド』紙の記事をごらんに入れましょう。

「ウォリングフォードの故ハワード・ハリス氏の未亡人であり、この町に住むジョージ・フォックス夫人の母であるパメラ・ハリスの遺体を運ぶ小さな葬列がクリーク通りをウォリングフォードに向かった。列席者は家族と近親のものだけに限られた。葬儀の日は、これ以上選ぶようのないほど美しい日であった。葬列がオター・クリークの谷間を抜け、ウォリングフォードのグリーンヒル墓地に通ずる、うねうねとした道を登っていったとき、山腹の紅葉は完璧といってよいほど色づいていた。遺体は故人の夫の傍らに埋葬された。

本紙は、ジョージ・フォックス夫人とその家族に、深い同情を表明するとともに、夫人の母親の長くかつ美しかった一生の最後の章が、バーモントのもっとも美しい秋の一日に書かれたので、それにふさわしい弔辞を献げる次第である」

祖母はこのようにして土に帰りました。祖父と祖母の遺体を、どこかほかのところに葬ったとしたら、それは冒瀆ぼうとくになるのではないかと思われるほどでした。

放浪生活の5年間

祖母の葬儀のしらせを待ったり、少年時代のいろいろな情景や出来事を思い出したりしながら、悲しい気持ちで大学の勉強を続けていると、私は同じ年齢のものならほとんどかからないような、ホームシックにかかってしまったのです。あの、谷間の静かなきちんとした家や、祖父母の愛情のこもった心づかいがなつかしくてたまらず、バーモントの山々を夢にまで見たほどです。それで、あとになって、西部の山々をまのあたりにしたときには、涙が出てきて、とまりませんでした。

なつかしい私の山々よ

雄大な母なる山々よ

心にこみ上げてくる恋しさを

なにものも、おさえることはできない

—ブリス・カーマン

それよりも1年前のこと、バーモントの村から出てきた私は、アイオワへ行く途中、シカゴで1週間滞在したのですが、この雑踏をきわめた西部の都会の落ち着きのなさや邪悪さが、あやしい魅力をもってこの私をとらえたのです。私の育った谷間とはまったく違

っていました。しかし私は、この町に何か活力といったものを感じとったのです。そこは、人びとの生き方を学べる場所でした。たしかに、人びとがむらがる場所というものがあるのですが、もしそうだとしたら、何が彼らを引きよせるのでしょうか。人間の生き方に影響を与える動機とは、何なのでしょう。なぜ、良い人と悪い人がいるのでしょうか。なぜ自分を犠牲にして人のためにつくす人がいるのでしょうか。彼らは金をもらったのでしょうか。もしそうなら、どのように？　なぜ、体力や精神力や道徳心を浪費する人がいるのでしょうか。彼らはそれから何を得るといえるのだろうか。祖父の教えのなかには、果たして何か英知というものがあるのでしょうか——それとも祖父は、善悪をわきまえながら常に人にだまされている、時代遅れの人間にすぎなかったのでしょうか。

アイオワでの最初の1年間、私はデモインにあるセントジョン・スティーブソン・ホワイズナンド法律事務所で法律を勉強しました。しかし、夏に入ると、私はオカボジャ湖に出かけ、魚釣りなど戸外の生活を楽しみ、ほかにさしせまってやることがないときだけ、法律の勉強をしていました。

秋になってアイオワ・シティにある州立大学の法学部に入学し、1891年の6月にそこを卒業しました。アイオワ大学では、以前には経験したことのない、まったく変わった状況にぶつかりました。学生が、バーモント大学やプリンストンの学生よりも年をとっているのです。ほとんどがアイオワの農家の出身で、もっと教育を受けるために必要な費用を得る手段として、学校で教えたことのある連中が多いのです。大部分は、遊ぶ時期を通りこしてしまった、勉強熱心な人たちでした。雰囲気は健全で、とくに法学部の学生は、自分

たちの部屋で、質問を出しあったり、法律の理論と実地を論じあったりして、夜を過ごすことが多かったのです。

筆者は今、いろいろな学校で経験したことを振り返ってみて、一体そこで自分は何を得たのかと自問したくなるのです。何かを得たとして、祖父の犠牲と要望をありがたかったと考えるだけのものが、はたしてあったでしょうか。やったかいのあるものだったでしょうか。

学校での経験で筆者が得た最上のものは、他の学生と接触したことから得たものです。学問という点では、おそらく多くの国の作家によって書かれた良い書物が好きになったことを除けば、多くを得たとはとてもいえません。

アイオワ大学在学中の最後の時期には、たったひとつ、興味をもって夢中になったことがありました。それは人間のさまざまな生き方を知りたいということでした。むろん、自分の国、アメリカの人たちが第一ですが、そのほか外国の人たちの生き方をも知ろうとしたのです。さて、うまく目的をとげることができるでしょうか。心の底では、それが気違いじみた企てだということはわかっていました。昔からのしきたりできまっていることを破ることはたいへんなことです。クラスの他の学生は、みんなまともな賢い人たちですから、卒業すれば、60日以内に、自分の選んだどこかの町で、法律事務所を開くのが普通です。故郷の人たちは、私が気が狂ったとしか思わないでしょう。

この分かれ目ともいべき大事なときに、あるきっかけがあって、私は自分の信念をますます固めることになったのです。というのは、卒業式の行事としての、ある講演のなかで、10年前にこの大学を卒

業したある弁護士がめいめい、まずどこかの小さな町に行って、そこで5年間ばかになってみる、そしてそのうえで、自分の好きな都会へ出て、そこで本当に業務を始めるという考えは、意外に賢明な計画ではないだろうか、と話したのです。

この助言は、私の心に残っていたためらいをすっかり溶かしてくれました。よし、ひとつ、小さい町などといわずに、世界中、行けるところならどこへでも出かけて、5年間、ばかになってやろう。すばらしい冒険だ！ したい放題、勝手なことをやったうえで、たとえばシカゴのような大都市に出て、看板を掲げ、それからは落ち着いて、ちゃんとやっていくのだ。そう考えて私は、あてもない旅に出て、その間、一度もあと戻りしなかったのです。国内でも外国でも、人びとに対する切実な興味だけで、なんとか旅を続けられるだろうというのが私の希望だったのです。

人間は人種によって、どうしてそんなに生き方が違うのでしょうか。大学の図書館で、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、北欧等、いろんな国の作家の書いた文学をたくさん読んだのですが、もっともっと知りたくなる一方でした。外国へ実際に行かなければ、人びとの生き方を知りたいという望みは、かなえられっこないと思いました。

私の、この大きな望みを達成するためには、手であろうと、頭であろうと、すべてをあらゆる形で使っていかなければなりません。山のなかを何百マイルも歩き続けたことも、大都会の街路を放浪して歩いたこともあります。ひろびろとした原っぱで野宿したことも、都会の安宿で寝たこともありますし、ときには、食物がなくて腹をすかせたこともあります。思わず、故郷の谷間と住み心地

の良い祖父母の家に思いをはせたことは、何千回もありました。腹がすいているときに、いちばんたびたび思い出したのはなんだったと思いますか。バターとメープルシロップをたっぷりぬったホットケーキでも、ニューイングランド名物のポーク・アンド・ビーンズでもなく、実は祖母がつくってくれたリズ・ドーナッツだったのです。遠い外国にいて病気になるたりすると、目の前にちらつくのは、祖母のつくってくれたチクマハッカ草のお茶や、お湯で足を温めてくれたりした祖母の優しい心づかいだったのです。

何ドルか残っている間は、北西部の田舎で釣りや狩りをするのはすばらしい休暇でした。しかし、サンフランシスコに着くずっと前に、所持金はなくなりました。自分でなんとかしなければならなくなったわけです。M・H・ド・ヤング氏が社主である『クロニクル紙』で働いていた大学の友人が、同紙の記者に世話してくれましたが、自分の書いた分だけしか金はくれないという条件でした。なにしろ時代が悪く、競争も激甚だったのです。私と同じく、同紙の記者のドンジリに、ルイズビル出身のハリー・C・ブリアムがいましたが、この男はあとで、野球のナショナル・リーグの会長になりました。

ハリーと私とは仲よしになり、ふたりで働きながらカリフォルニアを回ろうということになりました。3日めには、ふたりはベカ・バレーの果樹園で肉体労働をやっていました。そこでかなり儲けてから、私たちはカラベラス郡の大きな樹々をあとにして、トレールレス山脈を越える300マイルの徒歩旅行に出発しました。今では有名になっていますが、当時はほとんど知られていなかったヨセミテ溪谷を探検しました。次の仕事は、フレズノでの乾しぶどうの箱詰

め作業でした。それをすませて、やっとロサンゼルスに到着しました。そこで、私はロサンゼルス・^{ビジネス・カレッジ}商科大学の教師になったのです。

カリフォルニアで9ヵ月すごしたあと、次の目的地はコロラド州デンバーでした。この町では、オールド・フィフティーンズ・ストリート劇場の専属劇団に入って芝居をやるというわけで、私がいかに多芸であるかを示したのです。しかし、この仕事で私は思ったより有名になってしまったので、何人もの古い友人から手紙をもらいました。彼らは「あいつは道を踏みあやまった」と考えたようです。パイクス・ピークにも登りましたが、昔、故郷のグリーン・マウンテンできたえ、カリフォルニアのシェラネバダでもためしてみた私の足は、このロッキー山脈でも、ちゃんと役に立ったのです。私は、『ロッキーマウンテン・ニュース』紙の記者になりましたが、その仕事も、プラットビルの近くの牧場でカウボーイの生活を試みる機会がくるまでのことで、この牧場では、たったひとり馬に乗って何日も行方不明の牛を探して歩いたものでした。デンバーに戻って、今度は『リパブリカン』紙で働きましたが、ここでは東部にまい戻る途中のサンフランシスコの記者仲間の何人かといっしょになりました。

もうひとつ、ロマンスの国として私の心をとらえたのはフロリダでした。私は鉄道のパスをうまく手に入れて、ジャクソンビルにやってきました。この町では、当時最上級のホテルだといわれていたセント・ジェームズ・ホテルの夜勤係として就職しました。しかしホテルの仕事は単調だということがわかって、すぐにこれをやめ、次は大理石や花崗岩を扱っていたジョージ・W・クラークのためにセールスマンとなって、フロリダを旅して回ることになったのです。

この大理石の仕事は、バーモントのシェルドン大理石商会で働いていたときに、少々かじっていたのです。ジョージ・クラークは、この放浪者の生活に、大きな影響を与えた人物でした。何年かあとになって、ジョージは、ジャクソンビル・ロータリー・クラブをつくり、初代の会長になりました。

1893年の3月に、私はワシントンに向け出発しました。合衆国大統領グローバー・クリーブランドの就任式を見るためです。同地では一時、『ワシントン・スター』紙で働きました。ワシントンからケンタッキー州のルイズビルに移りましたが、そこには先のハリー・ブリアムが戻っていました。ハリーが同地の『クーリエ』紙か『ザ・コマースシャル』紙に世話してくれると思っていたのですが、この話はだめになって、私はまた別の大理石や花崗岩を扱う会社で働くことにし、おかげでケンタッキー、テネシー、ジョージア、バージニアの諸州を旅して歩く機会にめぐまれました。

バージニア州ノーフォークで、私はこの仕事をやめ、船でフィラデルフィアに向かいました。『トム・ブラウンの学校時代』を初めて読んで感心したときから、ディケンズ、サッカレー、スコットなどのイギリスの文人を夢中になって読んでいた私は、イギリスをひと目見たいものだど、あこがれていたのです。そして、そのためには、どんな苦しみにも耐えようと思っていました。フィラデルフィアのある新聞の求人広告で、イギリスに牛を輸送しているボルチモアの会社が牧夫を募集しているのをみつけました。その翌日の夜明け前、船はもう荒波を蹴たてていました。人生の現実的な面をいくらかでも学ぼうと望んでいた若者は、ちゃんとその船に乗っていたのです。ひどい航海でした。船の上の、苦しい欠乏生活は信じ

られないくらいで、食べものはとても食べものと呼べないようなものでした。乗組員と牧夫たちのなかには、これ以上考えられないほど性悪しょうわるのひどい連中もいました。ほんとうに、たいへんな経験でした。

同じ会社の別の船で帰らねばならなかったので、このときは、リバプールとその郊外だけしか見ることはできませんでした。ロンドンを見ることができなかつた失望は大きなものだったので、このイギリスの首都を訪れるためには、このような苦難をもう一度経験してもよいときえ思ったことでした。帰りの航海は、それほどひどくはありませんでしたが、牧夫たちには、マットレスも毛布も食器すらありませんでした。船独特のシチューは、ほとんどじゃがいもと汁だけで、肉の小片が入っているのは、ほんのときたまのことで、かびくさい船乗り用のビスケットが主要な食糧でした。ナンキン虫が多く、冷たい海水が入ってくるのはしょっ中でした。

ボルチモアで、次のもっと良い船を待っている間、私はエリコット・シティまで歩いてゆき、まもなく、とある乾し草畑で身体を使う機会を見つけました。私にとってはたいへんな仕事でしたが、一生懸命やりました。しかし、やがて食費と部屋代と引き替えに農家の手間仕事をするに変えました。とうもろこしの缶詰工場での仕事は1日1.5ドルくれましたが、その仕事をやっている間に、もっといい会社の家畜運搬船が近く出帆するという、うれしい話をきいたのです。ボルチモアに帰り、ミシガン号という船の副班長という仕事をもらいました。この船の目的地はロンドンから約30マイル下流のテムズ河のティルベリ・ドックでした。うれしかったこと！

私は、船上で知りあった友人とふたりで、じきに国会議事堂や歴史や小説で有名な場所を見ながら、ロンドンの通りを歩いていました。このふたりの懐ぐあい合ったいちばんいい宿屋は、ホワイト・チャペル地区にあった安い下宿屋でした。このあたりは社会研究者の卵にはとても興味のもてる地域でした。そのうえ船は帰途、荷物を積むためにスオンジーに寄ったので、この機会を利用して、ウェールズを少し見物することができたのです。

アメリカへ帰って、私はすぐに汽車に乗って、シカゴで開かれた1893年万国博覧会を見物に出かけました。この美しいコロンビア博覧会を楽しんだことは、私の放浪生活のなかの愉快的ひとコマでした。シカゴという人をひきつけてやまないこの大都会のもつ将来性というものを、私はこのとき、あらためて確認したことでした。しかし、汽車賃をつかってしまうと、あとに1セントも残っていなかったので、博覧会場で働いていた大学時代の友人を探し出して、その家に泊めてもらいました。ある日、バーモント館に入ると、思いがけず展示物を点検しているラットランドのフォックス家の従兄たち、エドとマティーの姿を見かけたのです。びっくりした私はすぐ、あと戻りして外に出てしまいました。^{おは}尾羽打ち枯らした若者は、自分の親戚の者の前に姿を見せたくなかったのです。

アメリカのあらゆる都市のなかで、いちばん行ってみたかったのは、ニューオーリンズでした。この都会は、アメリカの他の都市とは、いろいろな点で違っていたからです。しかし、どうやってそこへ行くかが問題でした。ここで申し上げておいたほうがよいと思いますが、私はこういう旅の間中、無賃乗車は1回もしませんでした。運賃を払うか、働いて払うかのどちらかで、必ず荷物は持っていま

した。生活の資を得るためには、どんな仕事でもやろうという心構えでしたし、いつも自分の力のありったけを傾けました。もし、うまくいかなかったことがあるとすれば、それは肉体的、精神的な限界を超えた場合で、いいかげんにやったことは一度もありません。借りた金は、いつもちゃんと返していました。

大学時代の友人から金を借りて、ニューオーリンズに着きました。同地に滞在中に「ブラクマイン郡のオレンジの摘みとりと、箱詰作業に人夫12、3名募集」という求人広告を見つけました。その翌日、私を含めた一団の男たちが、ミシシッピ河を渡り、その河口から遠くないデルタ地帯にあるピサティのオレンジ園の倉庫に向かいました。オレンジを摘み、箱に詰め、送り出すという仕事は数日間はずまく進行しました。しかし、突然、嵐が襲ったのです。それがハリケーンとなって、高潮まで寄せてきました。私は夜の真っ暗やみのなかを仲間といっしょに渦まく水のなかを泳ぐように渡って、婦人や子供たちを彼らの家から唯一の安全な場所—ピサティの倉庫に運んだのです。そのあと、私たちは、ツルハシやカナテコを使って、なんとか溝を切り、水を河へ流すようにしました。嵐がおさまったとき、堤防の上には馬や牛、豚やにわとりなどの死骸が累々としていました。1893年のこの海岸の嵐は、何百かの人命を奪い、物的な損害もたいへんなものでした。あれから何年もたちますが、あのときの恐怖と苦痛は、いまでもありありと記憶に残っています。

ニューオーリンズに帰ってから、また新聞の求人広告を探しましたが、うまくいきませんでした。この歴史的な町には、見るもの、勉強するものがたくさんあったのですが、私の冒険欲も少々勢いが弱まっていたので、フロリダのあの友人たちが、温かく迎えてくれ

るのではないかなどと、考えるようになっていたのです。

ジャクソンビルの大理石商会の私のあとは、まだ埋めてなかった
ので、そこへ戻ったわけです。ジョージ・クラークは、私がまだ行
ったことのない地域を、私に担当させてくれました。南部の諸州と
キューバ、バハマ諸島などです。ジャクソンビルのクラーク家を訪
ねるのは、ほんとうに楽しいことでした。雇い主とそのセールスマ
ンが大の仲良しだったのですから。12カ月たったとき、私はジョー
ジにやめると通告しました。「どこかほかに行きたいところはない
のかい？」とジョージが聞いたとき、私は「ひとつ行きたいところ
があるけれど、君はぼくをそこにやる気はないと思うな」と言いま
した。「どこ？」、私は「ヨーロッパさ」と答えました。2週間後、
私は再び海に出ていました。スコットランドの花崗岩の産地とアイ
ルランドやベルギーやイタリアの大理石の産地を訪ねて、外国産の
石を買う契約をしてこいという命令が出たからです。

イギリス、アイルランド、フランス、スイス、イタリア、オース
トリア、ドイツ、ベルギー、それにオランダで過ごしたすばらしい
何カ月かの楽しい話を書き続ければきりが無いと思います。しかし、
イタリアのカラカラのS・A・マックファーランドの家で受けた温
かい歓迎は、それほどよく知らない人たちから受けたものとしては、
ほとんど信じられないほどのものでした。とりわけ、マックファー
ランド夫妻は、ヨーロッパ旅行をもっと続けられるよう、資金を貸
そうといわれたのです。ありがたくお受けしましたが、あとでちゃ
んと返したことはいうまでもありません。

アメリカに帰ってからのお数カ月の間、ジャクソンビル近傍でジ
ョージ・クラークがやっていた土地分譲や建設計画を助けていまし

た。そのあと私の目は、北の方シカゴに向けられました。ジョージは「シカゴに落ち着けば、どんないいことがあるのか知らないが、ここに残ってもっと金儲けしてもいいんだよ」と言いましたが、私は「君の言うことはわかるんだが、ぼくはシカゴに金儲けに行くのではないのだ。ほんとうの生活をしてみたいくてゆくのさ」と答えたのです。

私は、ニューヨークはほとんど知らなかったもので、シカゴに落ち着く前に、この東部の大都会についていくらか知っておきたいと思っていました。ジョージは、もう一度友情を示して、ニューヨーク支店長をジャクソンビルに呼び戻し、代わりに私をニューヨークに派遣して、一時、ニューヨークの店をあずかせてくれたのです。

ジョージ・クラーク、まさにほんとうの友だち、実に気前のよい友人でした。

弁護士事務所の看板を掲げる

放浪にあてる予定の5年間は、まだ3カ月を残していたのですが、私はそろそろ弁護士事務所を開くつもりで、シカゴにやってきました。少年時代は終わったのです。旅行と労働は、大人になるよい経験になりました。人間というものは、知恵を得るためのあらゆる機会に背を向けてしまったあとで、経験という石ころだらけの、まがりくねった上り坂を苦勞してのぼってゆくことによって、賢くなることがしばしばあるのです。

私の生活が最終的にほんとうに落ち着いたのは1896年、私の故郷の谷間の楓が元気づく早春のことでした。実業や専門職業に従事する人たちの世界的な親睦を実現しようというビジョンは、まだできていませんでした。それには、異なった性質のさまざまな経験を、さらに積まなければなりません。しかし、すばらしい土台はすでにおかれていました。私の感じやすい心は、すでに悪のなかにも多くの善を見出し、不毛であるかもしれなかった場所でも多くの友情をつちかうことができました。また、実業家の人たちのなかにも、信頼と誠実を期待できる十分な裏づけを見出していました。この私の心が、このようなビジョンを受け入れるのは、なんの不思議もないでしょう。

シカゴは、ひどい時期を経験していました。私もこれを予期してはいましたが、ひどいといっても、私の放浪時代よりも、もっとひどい時期があるなどは私には考えられませんでした。私は、自分がひどい時期を処理する専門家だと思っていました。私は乏しいながらも自分のもっている力を十分出したつもりでしたが、法律の仕事を始めるのは、予想していたよりずっと困難でした。「看板を出す」のは簡単なことでした。その看板が大勢のお客を引きつけるとは思っていませんでしたが、まったく無視されるとも思っていなかったのです。しかし私が記憶しているかぎりでは、当初のお客はゼロでした。

裁判所の実務になれるために、私は裁判所で多くの時間を過ごし、夜遅くまで、訴訟事件の記録や判例を読みふけりました。しかし客は誰もきません。他の若い弁護士に相談してみましたが、うまい手はありませんでした。彼らのなかには、自分でちゃんとやっているものもあり、有力な親戚や友人をもっているものもありましたが、私のように裸一貫のものもありました。私が小さな弁護士事務所をスタートさせ、次いでこれをもうひとりの弁護士との共同経営にし、さらにパートナーの数を増やしていったいききつは、話が長くなりますから、ここでは細かくは述べないことにしますが、初めはゆっくりと回転していた車輪も、しだいに早く回り出したということです。やがて私は、弁護士協会や記者クラブやボヘミアンクラブなどの会員になり、商業会議所でも活躍するようになりました。

しかしなんといっても、5年間も無為の放浪を続けた少年が、いやもう若者になっていましたが、とにかくそういう年月のあとでは、落ち着いた生活に入って賢くなるのは、初めはとても困難でした。

とりわけ日曜や休日は、おそろしいほど孤独でした。シカゴに出てきている農村出身者や大学出のなかで、気軽に友人や隣人とつきあう喜びを知っている若い人たちと知りあう道はないものかと、いろいろ考えてはいたのですが、これが実を結ぶには、長い時間がかかってしまいました。

自分が少年時代を過ごしたところを、もう一度見てみたいという気持ちがだんだん強くなり、とうとう私は出かける日を決めました。いろいろ世話になっていたジョージ叔父がラットランドの駅に出迎えてくれ、栗毛のビリーの2代目が引く馬車で、家までつれていてくれました。ジョージ叔父は開業医としての仕事は続けていましたが、忙しかった時期はどうに過ぎて、万事のんびりとやっていました。屋根のついた堂々たる駅舎は火事で焼けて、そのあとにあまり立派でない屋根なしの駅が建てられていました。何をしゃべっているかよくわからないような大声で、自分のところの宣伝をわめきたてるベイツハウス、パーウィック、バードウェルなど3軒の主要なホテルの客引きが姿を消しているのにびっくりしましたし、マーチャント横丁、センター通りなどの盛り場は、シカゴから来た若者には、まるで18世紀のイギリスの詩人ゴールドスミスのうたった「荒れはてた村」の道路そっくりに見えました。

屋根が2段傾斜になっているジョージ叔父の家があるコテージ通りは、私が心にえがいていたほどには広くありませんでした。メリー叔母さんや従姉のマティーが、控えめながら、温かく迎えてくれました。この家族にもたくさんの変化があって、たいていの子供たちが家を出てしまっていたので、大きな笑い声はもはや聞かれませんでした。叔父は表通りから離れた横のベランダで、何時間も座

ったままで、何か物思いにふけているかのように見えました。彼は相変わらず親切でしたが、人に話しかけられて答える以外は、ほとんど口をききませんでした。

しかし、私がビリー（馬）のことを口にしたときには、叔父は身を乗り出して答えました。「若いころは、馬をたくさん持っていたよ。悪い馬は1頭もなかったが、いちばん人間に近かったのはビリーだったね。子供のように情をもっていたし、一番よくいうことをきいてくれた。自分なりの考えをもっていたが、頑固じゃなかったね。たとえ私の命令が間違っているとしても、不承不承そのとおりに動いてくれたものだ。私にはビリーの心を読むのはむずかしくはなかったが、奴のほうさがっと私の心を読んでいたね。最後には、私自身の判断よりも、奴の判断のほうをとるようにさえなったな。もっとも、奴が知らない事実が出てきた場合は別だがね。私の患者を奴にまかせるほどじゃなかったが、奴の守備範囲内のことは、まかせて大丈夫だったよ」

ラットランドに着いた翌日、従姉のマティーと私は馬車で、ウォリングフォードに出かけました。クリーク通り沿いの道でしたが、まがり角ごとに、遠い昔の日々のことを思い出させてくれました。この道は、家族の葬列が10月のあの日に、祖母の遺骸を運んでいったのと同じ道です。この道は何度も歩いた道です。ウォリングフォードに近づくと、見覚えのあるところがますます増えてきました。ジェイ・ニュートンの家、ロバート・マーシュの家、ハドソン農場、農機具工場、市^{イチ}のたつところ、カトリック教会、農家のハル家、スタッフォード家と続いて、最後に昔のわが家、少年時代のなつかしいわが家へ着きました。そしてその次には墓地を訪れ、祖父母の墓

前けいけんで敬虔なひとときを過ごしたことはいうまでもありません。

次の日かその次の日、私はウォリングフォードの宿屋に部屋をとり、旧友やなつかしい場所を訪ね始めました。私の日曜学校の先生であったアンナ・ローリー・コール先生は、活気のある現在と夢のような過去との間に橋をかけようとする私の努力を、実に能率よく助けてくれました。先生は今でもご健在で、私のこのふたつの時期をつなぐ輪の役を果たして下さっています。

昔お気に入りだった場所を、私は次から次へ訪ねてみました。屋根のついた橋がかかっている近くの、オター・クリークのよどみは格好の泳ぎ場所でしたが、車に乗って通りかかる人から見られるところで、子供たちはまっ裸でたわむれていたのです。彼らがときどき岩から飛びこんだのも、人に裸を見られたくないからではなくて、むしろ自分たちが、悪魔から解放された小鬼たちだということ人をびとに信じさせるという生意気な考えからだったのでしょう。子供たちの無作法な足が自由に踏みこんだところに、今は藪や草がすっかり茂っているのは残念でした。そのほかの点では、オター・クリークは昔のとおりでした。

次に訪れたのは、すばらしき日のフォックス・ポンド(池)でした。もっとロマンチックな魅力をもつリトル・ポンドにその地位を譲らなければならなかったときを除いて、この池は、いつもいちばんの呼び名でした。“氷の寝床”，子供用の小川，丘の斜面，山，次々と訪ねてみました。私の心の故郷であるこの谷間に帰っていた間、激動の数年間のためにすっかりぼやけてしまった少年時代の出来事を、記憶に呼び戻すのに十分な機会に恵まれました。山の斜面で寝ころがって静かに物思いにふけりながら、オター・クリークがおだ

やかに流れる谷間を見下ろしていると、今の私が、少年時代の私とそっくりなのにびっくりしてしまいました。ほとんど変わっていないという事実にもふと気がついて、驚いてしまったのです。基本的に私は同じなのです。下の谷間の墓地の土のなかに安らかに眠っているふたりの老人は、ちょうど芸術家が粘土細工をつくるように、きっちりと私をつくったのです。彼らの理想が、そのまま私の理想となったのですが、そのプロセスがなんともゆっくりで、かつしぜんであったので、祖父母も、孫である私も、それに気がつかなかったのです。もちろん、私とその理想どおりに生きてきたわけではありませんが、理想は理想としてちゃんと残っているのです。私の祖父母の基本的な考え方は、きちんとした明快なものでした。完全、検約、寛容、無私といった言葉が、堂々たるホワイト・ロックスの絶壁に巨大な文字で刻まれたとしても、これより明快ということはなかったでしょう。

山の上で、私がこのように白昼夢にふけているとき、なぜ起きて働かないのかという良心の叱声をきくこともありました。この忙しい世界には、しなければならないことがたくさんあり、それをやる時間が少ないのに、というわけです。しかし一方、人間は夢を見なければいけないのだという考えも浮かんできました。そうなる、この山の上よりもっと美しい夢の国は、ほかにはみつからないのではなかったでしょうか。

ある日、山を登る途中、二つの牧場の境のフェンスの石の上に腰を下ろして休んでいるとき、牛が草を食べている牧場の向こうの、クリークに沿った牧草地が下に見えました。そこでは乾し草の取り入れの最中でしたが、草刈り機械のカタカタという音が、気持ちの

よい音楽のように私の耳に聞こえてきました。草地のへりや隅のほうでは、儉約家の農夫が残った少しばかりの牧草や、勝手に生えたひなげしやきんぼうげをも、むだにしないように、調子よく鎌を振るっていました。また、農家の雇い人たちは、以前に刈って乾燥した草を山と積んで、深い雪が牧場をまっ白におおって、土地に窒素をもたらして地力を保持してくれる長い冬の間に使えるように、納屋の屋根裏に移す準備をしているのです。私のいるところが高すぎるので、新しく刈ったばかりの草の、かぐわしい香りは届きませんでしたが、私はその場の平和と静けさを満喫し、楽しい思い出の博物館のなかに、たっぷりとしまいこんだのでした。

私の夢は、その多くがどういうわけか、みんな実現しているという事実を思い出していました。ラグビーやオックスフォードに在学中のトム・ブラウン〔19世紀のイギリスの法律家、小説家であるトマス・ヒューズに『トム・ブラウンの学校時代』(1857)という作品がある〕の国を訪ね、シェイクスピアやディケンズの土地も、バーンズとスコットの国も訪れることができました。キラニイの湖水の魔術的な魅力もわかりましたし、アルプスの日没のすばらしさ、イタリアの空のソフトな色合いもよくわかりました。

このほかにも、多くの国のたくさんすばらしいものを見ることができたのですが、そのために祖父の援助を受けることはありませんでした。ただ、自分自身の惜しめない労力と、危険と、ときには飢えることもありましたが、とにかく自分自身の力によって実行することができたのは、なんともありがたいことだったと思います。良い夢を見てそれを実現してゆくのなら、夢を見ることも、おそらくそんなに悪いことではないでしょう。私の休暇は、あっという間に過ぎてしまいました。これからまた猛烈に働く世界に戻ることに

しましう。

最初のロータリー・クラブ

シカゴに戻ると、またいやな生活を送らなければなりませんでしたが、元気だけはおう盛でした。ウィークデーにはがっかりさせられるようなこともたくさん起こりましたが、それでもまあ、よかったのです——というのは、仕事が忙しくて、自分自身のことなど考えている暇がなかったからです。これに反し、日曜や休日はもの悲しい日でした。日曜の朝は下町の教会へゆけばよかったのですが、長い日曜の午後はどうにもならないほど孤独でした。あの、私の故郷のニューイングランドの谷間の緑の原や、心優しい昔の友人たちを、どんなに恋いこがれたことでしょう。市内の公園などを散歩しても、どうにもなりません。すべてがあまりにも人工的で、しかも散歩している人びとのなかに、知った顔ひとつなかったのです。日曜日の午後の市内の公園ほど、孤独を感じさせるところはありません。知らない人がたくさんいることが、かえって限りなく広がる大海原や大平原にいる以上に、孤独感を強めるのです。どんなに立派な楽団の演奏があっても、私のゆううつな気分は晴れませんでした。私のいたずらな思いは、ともすればオター・クリークにかかる屋根のついた橋のそばの水泳ぎ場や、その他たくさんのお聖なる場所など、少年時代の場面に舞い戻るのです。ときには、丘や山を友だちと

歩き回った思い出が津波のようにわき起こって、私の心をいっぱいにしてしまうこともありました。

シカゴ公園には、その故郷の谷間を思い出させるところもあるにはありましたが、そこも大勢の人が来ているので気は休まりません。ある日曜日には、遠く郊外にも出てみましたが、そういう田舎でも静けさが欠けているのです。船に乗ってミシガン湖で遊ぶと一時的にはほっとしますが、大勢の人たちから逃がれるわけにはいかないのです。というのは、船といっても男や女や子供が定員いっぱい乗っているからです。ドイツ料理、スカンジナビア料理、イタリア料理、ハンガリー料理と、さまざまなレストランで食べても、満腹するわけではなく、知り合いはできても、ほんとうの友人はできません。シカゴの湖岸は、海水浴客やピクニックの人たちでいっぱい、この都会で働く何十万という人たちのレクリエーションに重要な役割を果たしています。みんなが無料で入れる公園や遊び場をつくるために、私欲なしで一生懸命やっている当事者たちの努力は見上げたものだと思います。どこへ行っても、人、人、人、ですが、見知った顔はひとつもないのです。

私にひとつ、肝心なものが欠けていました。それは友人だったのです。エマーソンはっています「人間は、千人もの友人をもっている、ほかへさく友人はひとりもないのだ」。私が住むことにきめた町には、最初のころは、友人としてはその「千人」もいなければ、その「ひとり」さえもいなかったのです。

人間をめぐるさまざまな事態は、苦しむことによって、しだいによくなってゆくものです。誰かが、まずなすべき必要なことをビジョンとして頭にえがくと、そのビジョンを苦しみが一層明らかにし

てくれるのです。人間には友人がなければならないということも、先に述べたような経験をしなかったら、私もそれほど必要だとは思わなかったでしょう。おそらくこれも宇宙の仕組みの一部となっているもので、人間は同類の人たちと友人関係をもたなければならないということが、私にもはっきりわかったのです。

この大都会に住んでいる何百人か、おそらく何千人もの人たちにも起こったことを、私が経験しているのではないかという思いがしてなりませんでした。農場や小さい村から出てきて、このシカゴでえらくなろうという若い人たちが大勢いるに違いありません。事実、少数ですが、何人かは私も知っています。なぜ、そういう人たちを、いっしょに集めないのでしょうか。そういう人たちが、私と同じように、友人をつくることを求めているのなら、そこから何かが出てくるのではないのでしょうか。

ある晩、私は同業の友人に連れられて、郊外の彼の家を訪れました。夕食後、近所を散歩していると、友人は、店の前を通るごとに、店の主人と名を呼んで挨拶するのです。これを見て私は、ニューイングランドの私の村を思い出しました。そのとき浮かんだ考えは、どうにかしてこの大きなシカゴで、さまざまな職業からひとりずつ、政治や宗教に関係なく、お互いの意見をひろく許しあえるような人を選び出して、ひとつの親睦関係をつくれぬものだろうか、ということでした。こういう親睦関係ができれば、必ずお互いに助け合うことになるはずです。

私はこの衝動をすぐに行動に移すことはしませんでした。何か月も、いや、何年も経ちました。大きな運動を生かすためには、信念をもった人が、しばらくひとりで歩くことが必要なのです。私はほ

んとうにひとりで歩きました。そして最後に、1905年2月、3人の若い実業家を呼んで会談し、私たちすべてが、自分の村で知っているような、お互いの協力と気取らない友情を深めるための簡単な計画を彼らの前に提示しました。彼らは私の計画に賛成してくれたのです。

シカゴでの私のいちばんの親友であり、最初に私と会った3人のひとりであるシルベスター・シールが初代の会長にされましたが、彼はその後もずっと会員でした。あとのふたりは、ガスターバス・ローアとハイラム・ショーレーですが、このふたりは最後まではついてきませんでした。一方、いち早くグループに加わったハリー・ラッグルズ、チャーリー・ニュートン、およびその他の人たちは、この計画を進めるのに、いっしょになって熱心にやってくれました。

私たちは数も増え、親睦の度も増し、お互いに対し、また市に対しても力になれるという気持がしだいに強くなっていきました。銀行家とパン屋、牧師と鉛管工事業者、弁護士と洗濯屋、こういう人たちが、お互いの希望や問題や、その成功と失敗に共通するものがあることを発見したのです。私たちがいかに多くのものを共通にもっているかがわかりました。お互いに役立つことに喜びを見出したのです。ふたたび私は故郷のニューイングランドの谷間に戻ったような気になりました。

このグループの3回目の会合で、私はクラブの名称を2、3提案しました。そのひとつがロータリーというのですが、私たちは当時、会員それぞれの事務所や仕事場でかわるがわるの会合を開いていたために、この名が選ばれたのです。後になると、ホテルやレストランで会合が開かれましたが、やはり次々と場所を変えていました。

こうして私たちは、初めから「ロータリアン」であり、そのままそれが続いているのです。

シカゴ・クラブの最初の2年間、私はどんな役職にもつきませんでした。役員を指名したのは私でしたし、クラブの運営に関しては、みんなは概して私の判断に従っていました。今、振り返ってみると、私はときに独裁的だと思われたに違いありません。しかし、そうだったとしても、それは私がこの企てに身も心も献げていたからなのです。3年めに私は会長に選ばれましたが、そのときの私の抱負は三つありました——第一は、シカゴ・クラブをもっと大きくすること、第二は、この運動を他都市にも広げること、第三は、クラブの目標のひとつとして、社会奉仕を強化してゆくことでした。

以上が、この本を読む皆さんがその名前をよくご存じの、あるひとつの大きな運動の草創の物語なのです。こういうさきやかなスタートから、現在のような25万名に上る実業家と専門職業人の親睦が成長していったのです。ロータリーは現在、70の国に広がっており、事実ロータリーに太陽の没することがないといわれております。

私の受けた報酬は、とくに大きなものでした。世界中に友人をもつことはほんとうにありがたいことです。そしてこれらの私の友人が、お互い同士また友人であることを考えると、ほんとうによかったと思います。少年時代にあの谷間で聞いたたびにうれしかった「お早う、ポール」という挨拶が、今では仲間のロータリアンからの挨拶であり、相手が金持ちであろうと、貧乏であろうと、若い人であろうと老人であろうと、私の耳に気持ちよい音楽として響き続けるのです。

シカゴという大都会で集まった、この小さなグループの会員にと

って、ロータリーは砂漠のオアシスのようなものでした。彼らの集会は、今日のほかのクラブの集会とは違って、もっと親密であり、はるかに友情がこもっていました。面倒な、意味のない制約は振りすてられ、もったいぶったとりつくろいは入口で断られます。会員たちはみんな少年に戻るわけです。私にとって、クラブの集会に出席することは、あの谷間の家に帰るのと同じことだったのです。

ロータリーの初めの考え方は、どんどん広がっています。その理想はきちんと系統だてられ、その目標は綱領として提示されています。しかし、形式ばらない、心からの親睦が、ロータリーをつくってゆくうえに、欠くことのできない要素であることは変わりません。ヘンリー・ブラッドン卿がいわれたとおりです。

「ロータリーが、ひとりひとりを発展させてゆくひとつの方法は、各人のなかに少年の心を保ってゆくことである。善良な人たちの心の底には、必ず少年があって、その少年の人生に対する見方は、すばらしいもので、スポイルされてもおらず、偏見もなく、寛容であり、強い熱意と友好的な気持ちをちゃんもっている。少年の心がなくなってしまうときは悲しい。人が自分の心をしなやかに保ち、友人のよいところを見習っていく気持を失なわなければ、まったく老いさらばえるということはないだろう。ロータリーは、人間のなかの少年の心を生かし続け、自分を発展させてゆくよう、はげまし、助けるのである」

最初のロータリアンの何人かは農場育ちですが、多くは田舎か小さい町の少年で、この大都会に引きつけられた人たちでした。彼らは独力で偉くなった人たちではなく、偉くなる途上にあるといったほうがよく、彼らの大部分は、かなりの成功が将来見こまれるとい

う予想が、当たりそうだと思われる程度まではきていたのです。何人かは大学教育を受けていましたが、受けていない人のほうが多かったのです。

彼らは、優しい心と友好的な精神からにじみでるあらゆる方法で、お互いを助けあいました。主として、ビジネスのなかでお互いを助け、成功するように援助し合うことに努力が傾けられました。そのほうが良いとされる場合には、お互いに顧客となり、必要な場合にはお互いに相手のためになるように力を貸したり、助言を与えたりしたのです。これならビジネスに有利であるとさとした人もありましたが、そうでない人もいました。しかし、全員が親睦がお互いのためになるものであることをさとしたのはたしかです。

シカゴ・グループの会員が増加するに従って、そこに私たちはシカゴの断面図をもつようになりました。会員のひとりひとりが、それぞれ別々の、立派な職業を代表して会員となり、自分の職業の代表者として選ばれたことを名誉ある特典と考え、それに伴う責任をちゃんと自覚しているわけです。

会員を社会的、ないしは人種的な混合物にすることが、ロータリーの目的ではありません。ロータリーは、社会的な地位、宗教的な信条、そして国籍を異にする実業家と、専門職業人を集めて、お互いにもっと知りあうようにし、その結果、彼らがさらに多くの共感と友好をもって助けあうようにするのです。

1908年1月、すでに100名強に達していた私たちの仲間に、ふたりの新入会員が加わりました。アーサー・フレデリック・シュルドンとチェスリー・R・ペリーで、ふたりとも、この運動にその力を貸すよう運命づけられていた人たちでした。ふたりは数年前に知り

あったのですが、そのとき、シェルドンは書籍商として、ペリーが館員をしていたシカゴ公共図書館に“侵入”し、彼に歴史書の一セットを売ったのです。よけいなことをいうのはやめましょう。そのあと間もなく、シェルドンはセールスマンの成功はサービスをどうかにかかっており、取引の当事者双方の利益になって初めて正しい取引といえるのだという考えに基づいて、セールスマンの学校を開設しました。シェルドンは私たちのグループにうってつけの人物だったのです。彼はキカプー・インディアンのいんちき薬売りではありませんでした。英語が使われるところではどこにでも、シェルドンの学生たちがいます。私も、外国のロータリアンの指導者のなかに、たくさんみつけて喜んでいます。1921年のエジンバラ大会では、シェルドンはイギリスのロータリアンに、奉仕の理想をアメリカで理解されているとおりに伝えるのにもっともふさわしい人として、プログラム委員会から選ばれたのです。彼はこの招待を受諾しましたが、当時彼のメッセージを聞いた人たちは、まさにこれは天の声であったといっています。

ロータリーがもっと明るい空のもとで、もっと安定した気候のもとで、そして精神的に平静な都会でも、生まれたかもしれないということは考えられることです。しかしその反面、50年前には市民としての高潔さをめざす激しい戦いが行われたという、そういう矛盾に満ちたシカゴこそ、この運動の誕生の地として、よりふさわしかったのではないかと主張する人もたくさんあります。高潔をめざすいろいろな力が結集しつつあり、シカゴはまさに浮かび上がろうとしていたのです。前世紀の終わりとして新しい世紀の初めの10年が、あの美しかったコロンビア博覧会と、きれいな緑地のある大通りに

面した大きな大学を、シカゴにもたらししました。そしてそのほかにも、公共図書館が拡張され、商業会議所が発足し、壮麗な博物館、立派な交響楽団、さまざまな都市改善の組織、ジェーン・アダムスの設立した有名なハル・ハウスとその隣接セツルメント——そして、ロータリーが誕生したのです。

ロータリーのような運動が始まる時期としては、この20世紀の初めほど、よい時期はあり得なかったでしょうし、それを育てる都会としては、男性的で、しかも積極的な、この矛盾に満ちたシカゴほど、適した町はほかになかったろうと思います。当時シカゴがなやまされていた悪は、アメリカの至るところに見られました。概していえば、ビジネスは毒されていたのです。消費者や従業員、あるいは競争相手といったものに関して、高い倫理的な基準にあうようなことは行われていなかったのです。自分たちの住む町を良くしようなどという精神は、ほとんどどこでも低調でした。すべてが良いほうに変わってゆくべきときでしたし、そういうときがこなければならなかったのです。

シカゴというアメリカの中西部第一の大都会から、そして人種的、政治的、経済的、宗教的な極端と極端とが出会い、衝突し、そして究極的には、何か均質なものができ上がりつつあった大きな社会の渦巻のなかから、ロータリーは姿を現わしたのです。現在でも、人種の坩堝アメリカはシカゴでなおはげしく煮えたぎっています。愛国的な市民たちは、最後にはおいしい料理ができることを心から信じながら、質のよい材料をこの坩堝のなかに入れる努力を続けています。ロータリーは1905年、湖のほとりの町で上演されていた芝居の一場面だったのです。この場面の登場人物は普通の階層の人たち

実業家と専門職業人でありました。同種の職業の他の人たちととくに区別されるような点はないかもしれませんが、この人たちは、よく使われる言葉で「^{ベクレー・エレメント}社会の有益な分子」と名づけてよい人たちを、かなりよく代表していたといってよいのではないのでしょうか。

広がり始めたロータリー

最初のロータリー・クラブの発明者は、他の誰よりも、その足りないところに気がついていました。ですからロータリーが広がっていった、クラブの会員でない人びとまでそのおかげを受けるのを見て喜んでいましたし、他の都市にも同じようなクラブができたらしいということも夢みていました。

他の人たちもそうでしょうが、ロータリアンたちのなかには、ロータリーが、町から町へ、国から国へ、『アンクル・トムの小屋』に出てくるトプシーのように、どんどん大きくなっていったと考える人もいます。しぜんのままに誰も努力しないのに、延びていったと考えるのです。しかし、そうではありません。ロータリーは、適切な方式が考え出されたという事実だけで、大きくなっていったのではないのです。それを拡大させようという、たゆまない努力があったからこそ、ロータリーは世界的な影響力をもつようになったのです。

私とシカゴ・クラブの友人たちとの関係は、ロータリーの団結力をはっきり示すものです。ロータリーがもつ意味に関しては、私と友人たちの間でかなり違ったものになっていましたが、私と彼らの間の友情は変わりませんでした。

しかし、キリストの復活を疑った弟子のトマスのように、なんでも疑ってかかる人はどこにでもいます。そういう人を納得させるたったひとつの方法があります。それは、疑い深い人が、できるはずがないと言ったことを、ほんとうに実行してみせることです。こうすれば、シカゴ以外の町にロータリー・クラブをつくるのは不可能だろうといった人も、それが可能なことであり、またやらねばならないことだということをお納得するようになります。

しかし残念ながら、私の仲間であるシカゴのロータリアンの大部分は、「世界中にロータリーを！」という私の幻想へなだれこむことを拒否しました。こちらの望みを理解しない友人たちの無表情な顔ほど、人を当惑させるものはありません。物ごとをなしとげるもっともよい方法は、自分でやることだということをお、私はすぐにさとりしました。

そこでまず、ロータリー・クラブをアメリカ合衆国中の町に発足させようという仕事にとりかかったのです。この場合は四囲の事情で、手紙でやりとりをしなければなりません。そして私が学んだバーモント、プリンストン、アイオワの三つの大学の級友と、5年間の放浪時代にできた友人を、まずたよりにしたのは当然でしょう。

この仕事は、長く、そしてしばしばつらい苦行でした。頭の痛むことも心の痛むこともたくさんありましたが、しかし同時に、うれしくて浮き浮きしたときもありました。しかもその間ずっと、弁護士の仕事はやめないようにしていたのです。

最初の勝利を博するまでに、3年という長い時間がたっています。ある町に、ロータリーを組織しようという場合、その仕事にいちば

ん適任な人をまず見出さなければなりません、これが容易なことではないのです。サンフランシスコにメッセージを運ぶのをマニエル・ミュノーズにやらせてみたらまさに適任者であることがわかりました。彼は以前、シカゴのデル・ブラド・ホテルで私と同室であり、ロータリーのことにも、かなりよく通じていました。ミュノーズは、地震と火災のあと再建中であったサンフランシスコに商用で出かけ、そこでホーマー・ウッドという弁護士に関係ができ、彼に私との手紙の交換をさせたのです。その結果、1908年11月、第二のロータリー・クラブが誕生しました。しかしそれでは十分ではなかったかのごとく、きびんなサンフランシスコの人たちは、オークランドに第三のクラブ、シアトルに第四、ロサンゼルスに第五と、続けざまにロータリー・クラブを組織してゆきました。ニューヨークとボストンがその次で、他の都市もこれに続きました。疑いの目でみていた人も、これですっかり納得がいき、ロータリーを拡大する仕事に手を貸してくれるようになったのです。

こうして町から町へ、そして最後には国から国へと広がってゆき、私の5年間の放浪は大いに役立ったというわけです。結局のところ、私は以前に自分がつけておいた道の上を、ロータリーを引っ張っていったにすぎないのです。

私のリーダーシップがもっと巧みで、私のプランが前もってもっと明確につくられていたら、シカゴのロータリアンの完全な協力もきっと得られたでしょうし、もっと前衛をかためて着実に進んでゆくことができたかもしれません。事実、私が考えているロータリーという概念は、進化の過程にあって、徐々に変わってゆきましたし、ときには革命的に変わることもありました。私は以前には「楽しい

親睦」ということを強調していました。私はみんなのなかでいちばん自由で、いちばん陽気で、歌をうたうときも、笑い声を立てるときも、私がいつも真っ先でした。会員たちもそれで満足していたのです。ところが、何かはすっかり変わってしまったのです。こういう苦境に立つと、古い会員の考えを変えさせるよりは、いっそ新しい進歩的な考えで新しいクラブをつくるほうが、ずっと容易なことのように思われました。

アメリカ合衆国で成功したことから、私たちはロータリーを、国境を越えてカナダまで、押し広げようという気を起こしました。2回ほど試みが失敗したあと、やっと関心をもってくれる適任者が出てきて、国外の最初のクラブがカナダのウィニペグに組織されました。そのあと、カナダの他の都市もウィニペグに続きました。

うまくいったことで意気の上昇した私たちは、次にはイギリスでクラブを発足させることが何よりも大切だと思いました。そして、イギリスのあらゆる都市のなかで、ロンドンを私たちが選んだのはいうまでもありません。ロータリーの運動のなかにロンドンをかちとることが大きな目標になりましたが、やがて機会が開けてきました。

私の友人アーサー・フレデリック・シェルドンは、ロンドンに自分の仕事の現地代表者を持ち、近く訪問する予定でした。また、ボストンのロータリアンのハーベイ・C・ホィーラーは、ボストンとロンドンの両方に事業所をもっていました。シェルドンがロンドンの自分の代表者、E・セイヤー・スミスを一生懸命にならせるのはむずかしいことではありませんでした。そのうえホィーラーの協力を得て、ロンドンのロータリー・クラブが組織されたのです。ホィ

ラーが初代の会長になりました。現在、大ロンドンには70の立派なロータリー・クラブができています。そして同市よりも会員数の多い都市は、世界中にありません。

この仕事に慣れたシェルドンとスミスは、こんどはマンチェスターに出かけて、ロンドンと同じことをなしとげました。私自身も、このふたつのイギリスのクラブが創設されたことで、いささか得意になっていたとき、アメリカを旅行中にロータリーのことを知ったアイルランド人のスチュアート・モロウが、ダブリンに帰ったとたんに、同地にクラブを組織し始めたということを知ったのです。彼はすでにベルファストにも手をのぼしていました。私たちがただちにモロウと連絡をとり、エジンバラ、グラスゴー、バーミンガム、リバプールなどで彼が運動を続けることを認め、激励したことはいうまでもありません。イギリスとアイルランドに、やがて次々とできていった500のクラブは、ロータリーの運動をささえとりでとなっています。

私たちが次に専心したのは、ラテン・アメリカの国々です。たまたま商用で、キューバのハバナを訪ねるアメリカ人の実業家に、意を託しました。彼は高い理想と優れた能力をもった人でしたが、ハバナでロータリーのためにしばらく努力したものの、まったく失敗して帰ってきました。ロータリーはアングロ・サクソンの考え方であり、他の人種には理解され、受け入れられることはないというのが、彼の到達した確信でした。しかし、フロリダ州タンパのロータリー・クラブの会員エンジェル・キューエスタとジョン・ターナーのふたりは、私の使者が間違っていたことを説明してくれましたし、また今日のラテン・アメリカのすばらしいロータリアンと知り合っ

た人たちは、彼の結論が当時いかに間違っていたか、よくわかっていると思います。キュースタとターナーは、ハバナに立派なクラブをつくったのち、キュースタのほうは、この成功に気をよくして、自分の生まれたスペインに旅行し、ヨーロッパ大陸で最初のクラブマドリッド・ロータリー・クラブを結成しています。

キュースタはスペイン旅行を自費で賄っただけでなく、去る前に自分の生まれた都市の社会奉仕を一段と進めるために、まとまったお金を残していつているのです。彼は、自分で勝手に始めた仕事を終えて、アメリカに帰りましたが、仕掛けたのが自分だという以外には、自分の功績については一言も語りませんでした。この男は自分がどんなに大きなことをやったのか、知らなかったのです。彼はラテン・アメリカとヨーロッパの両方をロータリーに開いてくれたのでした。

モンテビデオのヘリベルト・コアテスは、アメリカ合衆国訪問中にロータリーのことを知り、帰国してから、モンテビデオ、ブエノスアイレスおよびその他の南米の都市に、クラブを次々とつくっていきました。

アメリカの土木工学技師のフレッド・ティールは、メキシコ・シティのロータリー・クラブ会長を務めたのち、年俸1万8,000ドルの地位をなげうって、年俸5,000ドルで新しい仕事を引き受けました。その仕事は、フランス、オランダ、デンマーク、その他の国々にキュースタたちが種をまいてつくった土台をもとにして、ロータリーをヨーロッパに広げるといふ仕事だったのです。ティールの仕事は、スイスのチューリヒに、国際ロータリーの事務局を設置することで頂点に達しました。

ふたりのカナダのロータリアン、カルガリーの「ジム」・デビッドソンとハリファクスのJ・ラルストーン大佐は、無報酬で自分の時間を使い、オーストラリアとニュージーランドを開拓しましたが、そのときはすでにロータリーには、このふたりの出費を賄うだけの経済的な余裕が実はできていたのです。何年かのち、デビッドソンは南ヨーロッパ、エジプト、インド、海峡植民地〔現在のマレーシアの一部、とシンガポールを含む〕、タイ、中国、および日本にクラブを組織することを企てていました。こうして、世界をぐるっととりまく輪が完成していったのです。彼は、自分と奥さんの費用を除いては、なんの報酬もなしに働いたのですが、夫妻はこの旅行だけで3年間かけています。アメリカを出るときジムは、自分が長く生きられないことをよく知っていました。彼は自分の仕事が完成するまではがんばりましたが、帰国してすぐに亡くなりました。

これまでに述べた事例は、いずれも目立ったものばかりですが、このほかにもビジネスの世界で高い地位にいる何千名というロータリアンが、ロータリーのために気前よく自分自身を献げているとあって間違いのないと思います。ロータリーが役に立つ範囲を広げてゆくにあって、献身的なロータリアンがやった無償の仕事は莫大なものでした。

北アメリカでは、ロータリー・クラブがいたるところに、何百、何千となくできていきました。組織づくりを専門にやる人は必要ありませんでした。どのクラブもできてみると、自分の町のためになることがわかって、こういう考えを他の都市にも手渡したくなるという状況だったのです。いくつかのクラブが集まって地区が編成され、そのなかのロータリアンが毎年「地区ガバナー」として選ばれ

ました。彼らは、ロータリーの目標と活動を地区内に拡大するとともに、さらにこれを前進させる責任を喜んで引き受けているのです。北アメリカのガバナーたち、およびその同僚である世界各地の地区ガバナーたちは、ロータリーを統一させるとともに、これを安定させる大きな力でしたし、これからもそうやってゆくでしょう。

ロータリーの拡大の記録は、ロータリーの歴史のもっとも興味のある部分の一つですが、その理想と活動も並行して発展してきております。言葉というものは、最初に行為があって、そのあとでつくられるものです。サービスがいろいろな形で実際になされてから、「サービス」という言葉が多様な意味と含蓄をつけて、ロータリーの計画のなかに書きこまれていったのです。ロータリーは、シカゴという都市のなかで、お互いのためにまた親睦のために、集まった土地の人びとのグループから、さらに国際的なビジョンと、ほんとうに崇高な目的をもった組織へと、しだいに発展していったものなのです。

市としての自覚に関するかぎり、ほとんど死んだも同然であったような、幾百の小さな都市や町が、ロータリークラブをつくってから新しい生命をもつようになりました。清掃のキャンペーンが始められ、ボーイスカウトがリーダーシップと支持を与えられ、少年音楽隊も組織されました。沈滞していた商業会議所が生き返ったり、また新しくつくられたところもあります。少年キャンプも設けられました。ロータリアンは口先だけではありません。彼らは、しばしば一致協力し、クラブ全体をひとつの力としてまとめあげのです。お金が出せないものは労力を提供します。キャンプをつくる時など、小さな町のロータリアンは、まさになんでも屋になります。釘

を打てる人は大工になるし、薬屋や八百屋は、必要とあればレンガ工や鉛管工になります。女性はおいしい昼食を用意し、ついにはロータリー・アンズという愛称までつけられるようになります。田舎の村で、近所の人が大勢集まって納屋をつくる手伝いをしたとき以来、こんなことはなかったことなのです。

ロータリーが、文明世界全体に定着していくのは間違いないと主張することはまったく愚かな考えだと、強く言い張った人びとも、結局は、旗を下ろさなければなりません。しかしそれは、私が1910年にシカゴで開催されたロータリー・クラブ全体の第1回大会と、もう一つは、1911年にオレゴン州ポートランドで開かれた第2回大会で、予言したことでした。

ロータリーの運動を国際的な規模にもっていくに当たって、私自身の5年間にわたるロマンチックな放浪生活が大いに役立ちました。あの放浪がなかったら、ロンドン、パリ、ローマ、ベルリン、その他世界の都市にロータリー・クラブをつくるというビジョンをどうして私をもつことができたでしょうか。他の人たちならともかく、私にはとてももてなかったでしょう。

ロータリーの設計者と施工者

万物をつくられた神は、ロータリーができたときにも好意をもって下さったに違いありません。私も途中で疲れきって勇気がなくなってしまったことが何度かありました。シカゴのクラブがつくられて3年めに入ったころ、夢を実現させるために、飛び抜けて骨を折ってくれる人が出てきたのは、ほんとうに神のみ心だったとしか思えません。この人がいなかったら、ロータリーに何ができたか。その人の出現はそれほど大きな意味をもっていたのです。チェスリー・R・ペリーは、シカゴ・クラブの活動に大いに熱意を傾けていたとはいえ、ロータリーの運動を拡大してゆくことに関心をもつようになるまでには、しばらく時間がかかりました。しかし、そうなったとき、私は彼がほんとうにありがたいパートナーであることを知ったのです。

チェスが「世界じゅうにロータリーを」という考えに転向したについては、ちょっと変わったいきさつがありました。新しくシカゴ・クラブの会長になったものが、ロータリーを「世界に広げる」ことに賛成できなかったので、チェスをクラブの拡大委員会の委員長に任命しました。もちろんそれは、不合理で実現の見込みがないと考える拡大運動に賛成の人たちを、挫折させるためであったことは

いうまでもありません。

私としては、シカゴ・クラブから総スカンを食うか、拡大委員会の新任委員長をもっと広い視野をもつように改宗させるか、どちらかをやらねばならないことになったわけです。

そこで、ある日曜日にチェスが暇なときを見計らって、電話をかけることになりました。ふたりの話しあいの中に、チェスは「ねえ、ポール、君が考えている理想に比べると、シカゴ・クラブなんてどうでもいいなどと、どうして考えるのかね」と聞きました。

私がそれにどう答えたか覚えていませんが、これは容易ならぬ事態だと察して、私の考えを守るためにいっせい射撃を始めました。チェスはそのときあまり多くを語りませんでした。私にとってはそれで十分でした。受話機をおいたとき、味方ができた、もう大丈夫だと確信しました。そのすぐあと、彼と私は、他の人たちからも助けをもらいながら、現存のクラブの連合会をつくる計画にかかりました。チェスは、ロータリー・クラブ全体の第1回大会を計画し、組織するのに大忙しになりました。

シカゴのロータリアン仲間の何人かは、前から乗り気で助けてくれていました。彼らはアメリカ国内に関しては可能性があるとみていたのですが、世界的な運動となる可能性まで頭にえがくものは誰もいなかったのです。むしろシカゴ以外の都市につくられたクラブのほうが、より視野の広い哲学を発展させるのに熱心で、状況に対して新鮮な見方をしていたくらいです。

チェス・ペリーは、肝どころをすべてつかまえて、万事を公平に評価する力をもっているようにみえました。彼はロータリーを感情的にだけでなく、知的にも大切にしていました。私がひとりで戦う

必要はもはやなくなりました。チェスがいつも私の傍らに、いや、いつも私の前にいてくれました。彼は闘志満々でした。

(16のクラブの代表が出席した) 第1回のロータリー大会は、1910年8月、シカゴのコンGRESSホテルで開かれました。チェス・ペリーは代表者たちによって議長に選ばれました。定款と細則が起草され採択されました。代表たちは長い時間をかけて、ロータリーの意味と可能性を論じあったのです。この第1回の大会では出席者は100名以下でしたが、それから20年後、ロータリー25周年記念として第21回大会がシカゴで開かれたときには、男女1万1,000名以上が出席しました。

第1回のシカゴ大会の終わりに、私は新しく組織された連合会の会長に選ばれ、チェス・ペリーはその事務総長に選ばれました。1911年のポートランド大会で、私は2年めの会長として再選されましたが、私の要請でチェスも事務総長として留任することになりました。私が現役から引退して国際ロータリーの「名誉会長」という栄誉を与えられたのは、1912年のドゥールース大会でしたが、チェスはそのときまたもや事務総長に再選され、このあと、1942年に引退するまで、彼は毎年再選され続けたのです。

チェス・ペリーと私がいっしょにうまく仕事をしてゆくことができたことは、ロータリーにとって大きな天の恵みだったと思います。おそらくそれは、私たちがロータリーによって感化されていたことによるものではなかったでしょうか。ある立派なことを全身全霊を打ちこんでやれば、必ずそのよさが自分自身に返ってくるものなのです。

「太陽のもと、新しいことは何もない」という言葉には英知が含ま

れています。おそらく、ロータリーのもっともユニークな特色は、会員がひとつの実業、あるいは専門職業からの代表ひとりに限られるという、いわゆる職業分類計画だろうと考えられます。ところが、ロータリーを思いつくよりも200年も前に、ロンドンには職業分類に基づいて会員をきめる社交クラブがあったのです。また、ベンジャミン・フランクリン（1706—90）も、職業分類によって「ジャントー」というクラブをフィラデルフィアに組織していました。何年も前に、フランスのストラスブールに本部をおく「博愛家協会」というのがありますが、これもその理想と目的においては、ロータリーとほとんど同一でした。いうまでもないことですが、過去のこれらの組織についての知識は、ロータリーが誕生したずっと後になるまで、創始者たちは知らなかったのです。

「ロータリーはどうして、その会員を1業種ひとりに制限するのか」という質問をよく受けます。その理由は、私たちが実験を続けているうちに、この職業分類によるやり方が、気のあった親睦を生むのに役立ち、ビジネスや専門職業の嫉妬心を回避し、お互いに助けあうことを助長し、各自の仕事の尊厳に対するプライドを刺激するとともに、さらに他の仕事の業績と問題点に関し、考え方と共感を広げてゆくようになることが、わかったからなのです。

あるひとつの専門職業あるいは実業だけに、その会員を限っている組織はたくさんあります。こういう組織は、現代の世界では、非常に重要な役割を果たしています。あるひとつの職業の人たちが集まって、考えや経験を交換し、共通の問題を議論することができるようになるからです。自分と同じ職業に従事していない人は全部排除するわけですが、こういう組織を排他的だという人は誰もいませ

ん。そうしないと、うまくいかないからです。外科医の団体は、製造業者や商店主は会員にいません。こういう組織が成功して役立つという見込みは、外科医学を知らない人たちを会員から排除することにかかっているのです。

この場合、外科医は仲間の外科医との接触から多くのものを得ることができるでしょうが、外科の医者とだけしか社会的な接触をもたないような人は、面白くない人間になってしまうのではないのでしょうか。他の実業や専門職業の人たちと接触して、視野の広がるような影響を受ける必要があるのです。もちろん、教会や社会的なクラブで、ある程度はこういった接触をもつことができるでしょうが、教会やクラブは、こういう必要を満たすために組織されているわけではありません。ですから、ロータリーの会員になれば、あらゆる職業の人たちと接触できて、しぜん視野を広げることができるわけです。

ロータリーの会員になるということは、同時に、ロータリアンとして掲げる理想と軌範を、自分の同業組合のなかにもちこむという責任をもたされるわけで、このことも見落としてはならないことです。ロータリアンは、ロータリーの理想と軌範を、自分の同じ職業に従事する人たちに、理解させ、受け入れさせるよう努力しなければなりません。

私は、アメリカ法曹協会、イリノイ州法曹協会、シカゴ法曹協会の会員であり、2年間シカゴ法曹協会の職業倫理に関する委員会の委員長を務め、また他の委員会の委員にもなったほか、ハーグで開かれた国際比較法会議には、協会を代表して出席しました。またアメリカ法曹協会では、国際委員会の委員となっています。こういう

地位はすべて、ロータリーの奉仕の理想を、自分の職業にもちこむ機会を与えてくれました。シカゴには、8,000人から9,000人の弁護士がおり、シカゴ法曹協会は業務の規準をあげるために、たいへんな努力をしています。それなのに、ほとんど300名におよぶ弁護士が、業務を立派に遂行するための軌範を守ろうとしないという理由で、詰め腹を切らされているのが実情です。

ついでですが、私が前記ハグ会議の代表を務めたことは、それ自体大変名誉なことでした。それだけでなく、同会議に出席した他の2名のシカゴ法曹協会の代表の1人が、アメリカのもっとも偉大な法学者Hジョン・ウィグモア氏であったということは、私にとって二重の名誉でした。ウィグモア氏は、いま、ワシントンのアーリントン墓地に葬られています。長く続いた深い友情のきっかけとなった、このハグ会議での氏とのおつきあいを私は誇りに思っております。

チェスはいつも私を表に立てて、自分はおっぱらデスクの仕事ばかり引き受け、そのうえ、年間を通してずっと働き続けで、休暇もほとんど取りませんでした。1日8時間労働どころではなく、いつも夜遅くまでデスクに向かっていました。この献身的な働きによって、彼はシカゴをはじめ世界各地の事務局で働く立派なスタッフを育て上げていきました。もし私のことを国際ロータリーの設計者と呼んでもいいとしたら、チェスも同じように国際ロータリーの施工者と呼んで間違いのないでしょう。

本部事務局はとても民主的につくられてゆきました。私たちは、いっしょに働く人たちを従業員とは考えず、むしろ同僚だと考えていました。重要な仕事をまかされているかどうかには関係なく、み

んながファースト・ネームで呼ばれ、またみんなは幹事を「チェス」、私を「ポール」と呼んだのでした。

チェスと私が通常の意味でのいわゆる「仲良し」だったとは、どう考えてもいえないでしょう。事務所で会えば、私は「お早う、チェス」と挨拶し、彼も「お早う、ポール」といいますが、いっしょに昼食を食べに行くことはめったにありませんでした。チェスとふたりでお昼を食べながら一時間ばかり、その日の出来事について話す機会があればと、どんなに思ったことでしょうか。しかしそういうことはあり得なかったのです。というのは、チェスは事務所で軽い昼食をとり、考えを中断することなく、仕事を続けたからです。

チェスには変わったところがありましたし、私にもありました。彼にとって当たり前のことと、私にとって当たり前のこととが、食い違う場合もあったのです。しかし、単に仲が良いというだけではない、もっと大切なものが、長い間に着実に育っていました。それは、お互いに尊敬しあうところから生まれる心からの愛情です。

同じような性質のものが、この国際的な運動の新しい会長や理事の地位についた人たちの心にも育っていました。彼らは就任しても、予期していた大げさな歓迎を受けず、淋しかったかもしれませんが、はるかに良いものを受けたのです。新しい役員たちは、仕事がうまくできるかどうか、みんな心配だったのです。うまくいくだろうか？ それぞれの町や地区ではロータリーの経験はたっぷりありますが国際ロータリーの会長や理事としての仕事はいささか気になるのです。しかし、日がたつにつれて、こういう心配はたいてい消えてゆきました。理事会の席上、会長の隣には、いつでもご用に立つように、しかし目立たないように、事務総長が座わります。そして、あ

れこれおだやかに触れたり、ここはこうしたらよいなどと、適切な発言をしてくれます。あらゆる疑問がみんなの心からすぐに消え、理事会が終わるころには、この事務総長の手もとにすべての情報が要約されてある以上、安心して管理運営ができる、という感じを一同はもつにいたるのでした。

1942年に、チェスが国際ロータリーの事務総長をやめるということになったとき、そうなったらロータリーはどうなるか、いやそれより、チェス自身がどうなるだろうか、いろいろな憶測がなされたものでした。メイン州ポートランドの出身でミシガン大学を卒業し、ミシガン州ハムトラムックのロータリー・クラブの会長をやったことがあるフィル・ラブジョイは、それまで12年間事務総長補佐をしていたのですが、誰がみても事務総長の職に適任であり、チェスの後任に正式に選ばれました。多くの人がおそれていたように、汽車が脱線するという事はなかったのです。フィルは自分の仕事をよく知っていましたし、事務総長補佐のレスター・B・ストルーサーも補佐役として有能でした。レスターはそれまでもう20年以上もロータリーのなかにいたのです。

チェスは引退してからシカゴ・ロータリー・クラブの活動に戻り、委員会の仕事から始めて、副会長を歴任し、やがて会員数770名を数える私たちのシカゴ・クラブの会長となりました。良いぶどう酒と同じで、チェスは年をとるとともに、ますます円熟してゆくのです。

中央事務局は、驚くほど能率をあげているだけでなく、ロータリーの教えを見事に示しているところです。熱心な、気持ちのよい150名の職員は、およそ月に1回、月曜日の昼食後、理事会が使う

大きな部屋に集まり、にこにこ笑うフィル・ラブジョイ事務総長のもとで会合を開きます。一同そろって歌をうたって気分をほぐしたあとで、フィル総長が、前の1カ月と次の1カ月の行事を、適宜ユーモアを飛ばしながら、大急ぎで概説します。そしてその間に、男女各人それぞれ、この運動の諸目的について教育を受けるとともに、この世界的な組織のなかで、めいめいの果たすべき役割がいかにより重要なものであるかをさとるということになるわけです。

ロータリーを世界に拡大する仕事を容易にするとともに、既成のクラブへ奉仕する目的で、事務局が早くからイギリスのロンドンにおかれていましたが、やや遅れてスイスのチューリヒとインドのボンベイの両事務局が事務総長の監督のもとに設置されました。これらの事務局は、イギリス、アイルランド、ヨーロッパ大陸、アジアの各クラブにたいへん役立っています。1911年に私たちは、ペリー事務総長がロータリーのために雑誌を刊行し、あわせてその事務を行うことを認めました。この雑誌はロータリーという運動を進展させるとともに、ロータリアンの間に連帯を保持するという点で、たいへん重要な役割を果たすまでに成長しています。この雑誌は学校や図書館でも歓迎され、また他の出版物にも引用されることがしばしばあります。『ロータリアン誌』はここ数年間は、有能なリーランド・ケースのもとで編集され運営されていますが、一方、スペイン語版のほうは、マニュエル・イノホザの手によって上手に刊行されています。

ロータリーの運動の急速な進展は、当然のことながら多額の出費を伴うことになりました。それはすべて、あらゆるロータリー・クラブの会員の比較的少額の人頭分担金で賄われます。これらの会

員たちは、他の都市や他の国の人たちがロータリーについて学ぶとともに、その恩恵をわかち機会が与えられ、そして今度は逆に、ロータリーの一層の発展に対して貢献することができるようになることを、心から望んでいるのです。財政の方針は常に保守的で健全なものであり、現在もっているもので賄える範囲内で、やってゆくというのです。そして、思慮深く、見通しのきく人たちが、予見する非常事態に備えて、予算に十分の余裕をとっています。

今日の年間予算は膨大のようにみえるかもしれませんが、これも、アメリカだけでなく全世界のロータリアンが、この世界を一層良い、一層住みよい世界にできるという希望をもたせてくれる運動を進めているという満足感以外にはなんの見返りも求めずに、ロータリーのために最大の努力をつくしているのだ、という事実がなかったら、こんな額ではとても済むものではありません。

ロータリーがまだ初期であったころ、国際ロータリーからオーストラリアとニュージーランドにロータリー・クラブを設立することを委託されていた、ふたりのすばらしいカナダのロータリアンを、ペリー事務総長がシカゴの私の事務所に連れてきたことがありました。彼らが「ロータリーの創始者」と呼んでいるこの私に、会いたいというのです。この名誉はありがたく受けましたが、私の役割が強調されすぎているのではないかと申しました。チェスはお客に代わって「ねえ、ポール、ロータリアンたちが君に会いにくるのは、大きな河の源流を見たくて出かけるのとまあ同じことさ」と答えました。

その後、私は彼のこの言葉を何度も考えてみました。私を大きな河の源流にたとえて、とてもほめているわけです。私をほめる言葉

としては、それはそれでありがたいのですが、大きな河がたったひとつの源流から流れてくるなんてことがあるでしょうか。そうではないと思います。何百、否、何千という小さな流れが音をたてて山腹を流れくんだり、しだいに合流して大きな河になってゆくのです。

ほんとうに、ロータリーの成長とそっくりです。ロータリーも、多くの国の何千というロータリアンの自己犠牲的な貢献によって、大きくなってきたのです。

私のあと、国際ロータリーの会長には、献身的な有能なロータリアンの長い列が続き、この運動に偉大な生命を吹きこみ、素晴らしい姿勢と性格を形づくるのに貢献してきました。彼らの出身地は、アメリカだけでなく、カナダ、メキシコ、イギリス、フランス、ブラジル、ペルーに及んでいます。そしてそれら会長のひとりひとりが、理事として、委員として、また地区ガバナーとして、いろいろの国から来ている有能な人たちに、仲間としてつきあってもらってきたわけです。各年度の役員は、奉仕の理想によって結ばれた実業家および専門職業人の世界的な親睦をはかるという私の理想を、拡大し発展させていくのに、重要な貢献をしてきましたし、またなしつつあるのです。各クラブの役員や会員も、役に立つ貢献をたくさんしてくれました。ほんとうに、ロータリーという大きな河は、多くの人たちの貢献——支流——の集まった総合計なのです。

国際ロータリーは、いろいろな点でひどく幸運にめぐまれてきましたが、会長の選任がとくにそうでした。会長たちのこの運動への貢献、彼らが見事に発揮した忠誠心、献身、犠牲的精神、さらに彼らがこの運動において示したリーダーシップを書きしるそうとすれば何冊もの書物になってしまいます。ここにせめて名前だけでも列

記して敬意を表したいと考えます。

- 1912—13 グレン・C・ミード（ペンシルバニア州フィラデルフィア）
- 1913—14 ラッセル・F・グレイナー（ミズーリ州カンザスシティ）
- 1914—15 フランク・L・マルホランド（オハイオ州トレド）
- 1915—16 アレン・D・アルバート（ミネソタ州ミネアポリス）
- 1916—17 アーチ・C・クランプ（オハイオ州クリーブランド）
- 1917—18 E・レズリー・ビジョン（カナダ，ウィニペグ）
- 1918—19 ジョン・プール（ワシントンD・C）
- 1919—20 アルバート・S・アダムズ（ジョージア州アトランタ）
- 1920—21 エステス・スネデコル（オレゴン州ポートランド）
- 1921—22 クロフォード・C・マックロー（カナダ，フォート・ウィリアムス）
- 1922—23 レイモンド・M・ヘブズ（ミズーリ州カンザスシティ）
- 1923—24 ガイ・ガンデーカー（ペンシルバニア州フィラデルフィア）
- 1924—25 エバレット・W・ヒル（オクラホマ州オクラホマシティ）
- 1925—26 ドナルド・A・アダムズ（コネティカット州ニュー

- ーヘブン)
- 1926—27 ハリー・H・ロジャーズ (テキサス州サンアントニオ)
- 1927—28 アーサー・H・サップ (インディアナ州ハンティンドン)
- 1928—29 I・B・トム・サットン (メキシコ, タンピコ)
- 1929—30 M・ユージン・ニューサム (ノースカロライナ州ダーラム)
- 1930—31 アルモン・E・ロス (カリフォルニア州パロアルト)
- 1931—32 シドニー・W・パスカル (イギリス, ロンドン)
- 1932—33 クリントン・P・アンダーソン (ニューメキシコ州アルバカーキ)
- 1933—34 ジョン・ネルソン (カナダ, モントリオール)
- 1934—35 ロバート・E・リー・ヒル (ミズーリ州コロンビア)
- 1935—36 エド・R・ジョンソン (バージニア州ロアノク)
- 1936—37 ウィル・R・マニエー2世 (テネシー州ナッシュビル)
- 1937—38 モーリス・ジュペー (フランス, パリ)
- 1938—39 ジェオ・C・ヘイガー (イリノイ州シカゴ)
- 1939—40 ウォルター・D・ヘッド (ニュージャージー州モンクレール)
- 1940—41 アーマンド・ド・アルーダ (ブルジル, サンパウロ)
- 1941—42 トム・J・デービス (モンタナ州ビュート)

- 1942—43 フェルナンド・カルバヤール（ペルー，リマ）
1943—44 チャールズ・L・ホィーラー（カリフォルニア州
サンフランシスコ）
1944—45 リチャード・H・ウェルズ（アイダホ州ボカテロ）
1945—46 T・A・ワレン（イギリス，ウルバーハンプトン）

シカゴのアーサー・フレデリック・シェルドンは、実業における私たちの奉仕の責任を、一層はっきりとみることができるようになってくれました。「もっともよく奉仕するもの、もっとも多く報いられる」という標語を考えてくれたことに対して、私たちは彼に感謝しなければなりません。この標語は奇妙に思えるかもしれませんが、他の人たちに最善のものを与えようとすれば、自分も最善のものを得られる結果になることは大いに考えられるとして、受け入れられたものであります。ミネアポリスのロータリアンたちは、「超我の奉仕」という私たちのもうひとつの、もっと簡潔な標語を考えてくれました。

シアトルのロータリアンたちは私たちの基本綱領を、またシェーシティのロータリアンのあるグループは、私たちの守るべき道徳律を考えてくれました。このほか、たくさんの同じような貢献によって、私たちの運動は正しい方向に進むよう助けられたのであります。

1915年には、フィラデルフィアのガイ・ガンデーカーは、新しい理想や規準を示すのではなく、当時ロータリーが理解されているままの姿を示すために『ロータリー通解』と題する小冊子をつくりました。これはロータリーの意義ある運動にとって、たいへんありがたい貢献でした。

アラバマ州バーミングハムのロータリー・クラブは、イギリスとア

イルランドのロータリー・クラブがやっているように、一般の人びとにロータリーをわからせるという点で、貴重な貢献をしてくれました。

二番目のクラブができる前でしたが、私は社会奉仕の重要性を考えて、シカゴのロータリー・クラブに対し、市当局や他の市民団体にも呼びかけて、シカゴ市内に公衆便所をつくる運動を始めさせたことがあります。私たちの最初の企てとしては、他にもっと魅力のある目標を選ぶことができたかもしれませんが、これ以上大勢の人たちを動かす目標をみつけるのはむずかしかったろうと思います。ふたつの強い勢力が私たちに反対すべく立ち上がりました。ひとつはシカゴ酒造組合で、シカゴにある6,000軒の酒場が1軒のこらず、男性に便所の設備を提供すると主張し、もうひとつは、ステート・ストリートの百貨店組合で、店の便所を女性たちに無料で使わせるというのです。ただ、これらの提案者は、便所を使うためには男性はビールをひと缶買うこと、また女性は何かその店で買わなければならないというのです。結局、公衆便所は設置されました。

二度の大戦とロータリーの奉仕

1910年のシカゴ大会のあと、ロータリーは着実に発展を続けました。1年以内に合衆国のクラブ数は28になっていました。力をあわせて全国的な広がりまでもっていったことから、たとえ全部でなくとも、多くの国を含む国際的な規模にしたいという夢も出てきました。翌年、カナダのウィニペグとロンドンが加わったとき、クラブの数は50になっていました。

1913年、大型の竜巻がネブラスカ州を襲い、オハイオ、インディアナ両州ではひどい洪水に見舞われました。これらの州のロータリー・クラブは、全国のクラブの支援を受けて、人間や動物の救助と給食に乗り出し、必要な復興工事も援助しました。このときロータリーは、奉仕の組織として、最初の大きな試練にぶつかったのです。

続いて第1次大戦となって、イギリスやカナダのロータリー・クラブは、自分たちが戦時にも価値ある存在であることを示したのです。そして戦争の最後になって、合衆国とキューバが参戦したとき、これらの国のクラブも、イギリスやカナダのクラブとまったく同じように、戦時の奉仕に活動しました。ロータリーの最高の目的は奉仕することであり、戦争という特別の場合ほど、奉仕のふさわしいときはありません。ロータリーがアメリカ人の最大の資産のひ

とつであることがわかったのです。ロータリーは、私たちの自由の国で生まれたのですが、自由の国であれば、どこでも生まれたことでしょう。しかし、専制主義の国で生まれるはずはなかったのです。会員のなかには、感情的に興奮して、私たちの昼食会を戦時中はやめようといひ出すものもありましたが、賢明な考え方が勝ちました。ロータリーの昼食会は、士気を盛り上げるための拠りどころ——集まって、より大きな奉仕を計画する場所であることがわかったのです。

戦時中のロータリーの大会は、1917年と18年の二度開催されました。文明が危機にあるとき、他のことは後まわしになります。大会は戦時の奉仕のためだけに開かれたのです。

戦時国債の売出しや、兵営や基地に図書館を設置したり、訓練基地に近い町では兵隊用の交歓、慰安の設備をつくったりする運動にも、ロータリアンは心からの熱意をもって参加しました。戦争で被害を受けたヨーロッパの人たちに衣類を送ることに協力しました。アメリカの参戦直後には、当時アメリカにあった300以上のロータリー・クラブが協力を申し出る窓口として、ワシントンに委員会をおいたくらいです。彼らは、兵役に服するアメリカの若者が、単なる「大砲の餌食」としてでなく、年若い愛国者として、駐留する場所の近くの市町村で十分にくつろげるように、とくに気を使ったのです。(これが第2次大戦で、米軍慰問協会がつけられる背景となったものです)

第1次大戦が終わりに近づいたとき、私たちは政府の高官筋から、政府の要請に愛国心をもって忠実にこたえたあらゆる組織のなかで、その早さ、能率、あるいは達成した成果において、ロータリーにま

さるものはひとつもなかった、といわれました。

戦争の間は、外国へ拡大しようという私の望みは抑えられていましたが、アメリカ合衆国、カナダ、イギリスとアイルランド、それにキューバのクラブはその数を増し続け、1919年までに、アメリカ合衆国にほとんど500、イギリスとアイルランドに24、カナダに23、そのほか、中国とフィリピンにひとつずつという数になっていました。さらにそれから1、2年のうちには、ウルグァイ、アルゼンチン、パナマ、インド、スペイン、日本、フランス、オーストリア、ニュージーランド、南アフリカ、ブラジル、ペルーの諸国にもクラブができました。

力つきて苦しもうにしながらも、平和の鳩がとうとう羽ばたいたとき、ロータリーもやっと正常な機能を再開することができました。戦争もそれなりに価値はありました。目に見えないものの価値を私たちに教えてくれたからです。どんな値段でも自由が高すぎることは決してないことを教えてくれたからです。ロータリーは、世界の永続する諸勢力のなかに、そしてドルでははかれない、眼に見えない価値をもつもののなかに、確固たる地位をすでに占めていました。奉仕という薪まきをくべなければ、インスピレーションという炎もすぐに消えてしまいます。奉仕によって困難から脱け出したことは建設につながるのです。これからの再建の日々に、なすべきことはいくらでもありました。

1921年、北アメリカのロータリアンは、文化と宗教と教育の町——古典的で美しいエジンバラで開催された、海外初のロータリー大会に向かう2隻の大型客船を、その出席者で満員にしてみました。その大会が終わったあと、ロータリーはヨーロッパの大陸に

さっと広がりました。そして、南のほうは、ラテン・アメリカへも延びていったのです。全世界へというビジョンが、現実のものになりつつありました。知的な心が広がってゆくに連れて、情的な心も広がり、あらゆる人間を包む友情とか、すべての国家や人種の違いをすべてゆるす寛容といった気持ちができ上がってゆくのです。歴史に現われる大きな誤りは、人の心理が個人の出来事に影響するだけでなく、国家の出来事にも影響するということを、外交官や政治家が理解できなかつたところから起こっているのです。

次の10年間で、世界はアメリカをはじめとする多くの国で始まった大不況によって、ひっくり返ってしまいました。人びとは自分自身をも信じられなくなったほどでした。株式市場は暴落し、工場は閉鎖され、どこも失業者でいっぱいになりました。合衆国の多くの団体では会員の数が激減していました。ロータリーがほんのわずかの損失で済んだのは、ほんとに慶賀すべきことでした。世界のいたるところで、ロータリー・クラブは、士気を維持する拠りどころとして価値があることが、わかってきていました。ロータリーの集まりは、疲れきった実業家が、お互いに新しい勇気を与えあうことができるほどの親睦の場所となっていたのです。

またまた、戦雲が立ちこめました。再び嵐が世界を襲ったのです。1939年から1945年に至る間のロータリー・クラブの戦時奉仕の数々は、とても膨大で、ざっと触れる程度のことしかできません。侵略戦争によって、ある国ではいくつかのロータリー・クラブが活動を停止する——少なくとも活発な、公的な活動はやめざるを得なくなりましたが、しかし、できるときだけでも、なんとか集会だけは続けていました。侵略戦争を行っていない国や侵略の犠牲になってい

ない国では、ロータリー・クラブは何をなすべきか、わかっていました。すぐに活動が始まりました。政府の要請と同胞たちの必要に対して、急速に、かつ能率よく、こたえました。自分の国で訓練されている連合国の軍隊や避難してきた人たちのことをよく考えて、いろいろと援助を惜しまなかったのです。

イギリスの500のロータリー・クラブの会員たちは、物すごい空襲のショックには参ったものの、いくつかのクラブを失ない、会員数がすこし減少したあと、立ち直って前より一段と強くなりました。イギリスのロータリアンは、戦争によってロータリーの必要が減ったのではなく、ロータリーがますます必要になったという気持を強めたのです。イギリスのロータリーは今日、以前よりも一層強く、一層人間的に、また思いやりのあるものとなっています。あらゆる砲撃も、あらゆる爆撃も、彼らが会合の場所と時間を見出す邪魔にはならなかったのです。

フランスのロータリアンは、国内の被占領地域で侵略者から強制された場合を除けば、一度も手を引いたことはありません。シャルル・ジュールダン-ガッサンは、フランスのニースで開かれた1937年の大会のホスト役でしたが、戦争中もずっと引き続きロータリーの地区ガバナーをやっていました。また、いろいろな国で、自分らの親睦を保持しようと固く心にきめていたロータリアンは、侵略者から罰せられる危険をおかしたり、秘密に集会を開いたりした場合もありました。戦時下のロータリーの一面として記憶に残っている、スリルに富んだ事件はたくさんあります。以前に国際ロータリーの理事であったポーランドのあるロータリアンは、シカゴの中央事務局に彼の最後の挨拶になるかもしれないメッセージを送るため

に、ワルシャワ市内に雨と落ちる爆弾をくぐって、アメリカ大使館まで2マイルの道を歩いていったのです。デンマークのロータリー・クラブは、彼らの国王と勇気を競うかのように、ナチの占領下にもその会合を続けていました。また、マニラのロータリー・クラブはマニラが占領されたあとはパターンで会合を開き、カルロス・ロムロはアメリカに逃がれ、その一部始終を伝えています。はるか中国の奥地では、重慶のロータリー・クラブが、どんなにたくさんの爆弾を投下されようとも、毎週の会合を開き続けていました。インドのカル Катタでは、爆撃下でさえも、また侵略者がすぐ近くまで来ているかもしれないという恐怖にさらされながらも、ロータリーの地区大会が開かれていました。

ドイツやイタリア、あるいは日本のロータリアンは、政府が侵略と戦争の計画を開始したとき、あるいはその準備に入った段階で、集会を続けるのは不可能だと判断しました。しかし、これらの国の多くの善意の人たちの心のなかには、その後占領された地域でもそうであったように、ロータリーの集会を中止せざるを得なくなったときでも、ロータリーの精神が相変わらず持続していたことは、疑いのないところです。

戦争は、占領されていない国々にロータリーを拡大しようという動きに、良い刺激を与えたといえます。戦争でやられた国で失った分は、その国々での発展によって帳消しになりました。合衆国には、拡大の余地がまだたっぷりありました。しかし、拡大の仕事が続けてゆくという重荷は、責任を分けあってくれるカナダ、メキシコ、ニュージーランド、オーストラリア、キューバ、南アメリカの諸国のロータリアンによって、すでに合衆国のロータリアンの肩から外

されていたのです。

国際間の情勢が落ち着けば、ヨーロッパ大陸全般にわたってロータリーが再び確立されるであろうことを疑った人を、私はひとりも知りません。地区大会は、スウェーデン、フィンランド、デンマーク、スイスですでに開かれつつあり、他のヨーロッパの国々の以前のロータリアンも、辛抱強く機の熟すのを待っていました。ロータリーが専制的な命令によって永久に消されてしまうことなど、有り得ないことなのです。

私がかつてドイツ、エストニア、フィンランド、ノルウェー、中国、日本で植えた友情の樹は、戦争の破壊のもとでしおれてしまったかもしれませんが、その樹の姿とそれを植えた目的とは、常に緑あざやかに、私の心に残っています。ヨーロッパにおけるロータリーの再建は入念に計画されつつあり、遠い国々にも新しいクラブが続々と誕生しつつあります。

政府と関係のない純粋に民間の団体のなかで、国際ロータリーの役員や各加盟クラブほど、政府から丁重な扱いを受けているものはないでしょう。ヨーロッパやアジアで開かれた大会や会議は、特別な好意を受けています。たとえば、開会式に国王や政府の元首が出席してくれたり、特別の郵便切手が印刷されたりしました。また国際ロータリーの会長には、必ず訪問先の国で、政府の高官が歓迎の会見をしてくれるのです。

私の友人のなかには、私がこれまでに受けた名誉についても述べたほうがよいと言う人もいます。私に名誉を与えてくれた政府やその他の機関は、ロータリーの運動が社会に対して価値をもっていることを理解していて、私に名誉を与えることによってそれを示した

かったのだと考えれば、公表してもよいかもしれません。ロータリーに与えられた名誉として、私は受けたのですから。以下列挙すると次のとおりです。法学博士（バーモント大学）、シルバー・バッファロ賞（アメリカ、ボーイスカウト）、南十字勲章（ブラジル）、有功章（チリ）、有功章（エクアドル）、クリストファ・コロンブス章（ドミニカ）、レジオン・ドヌール勲章（フランス）、太陽章（ペルー）、名誉法学博士（ペルー、リマ大学法学部）。何十名かの国際ロータリーの会長その他の役員に対しても、同じような勲章がさまざまな国から与えられています。

戦争の間もロータリー・クラブは会合を開き続けて、自分の国と人類に奉仕しただけでなく、また、戦時の試練とも取り組んでいたのですが、一方において、先を見通す力をもっていたロータリーの指導者たちは、どこの国でも、戦争は結局は終わるであろうということを知っていたのです。侵略が押し返され、自由が再び確立されることに疑問はありませんでした。ロータリアンは、このことをなしとげるように力を貸しながら、戦後の建設の仕事にも思いをはせていたのです。第1次大戦のときに、私たちは感情的になってはだめだということがわかったので、今度はその代わりに、はるかに頼もしい固い決意をもって臨んでいました。国際連盟よりももっと良い世界的な組織ができなければなりません。利己心を抑え、他人に対する思いやりと援助というロータリーの理想を、もっと強化していかなくてはなりません。

そこで国際ロータリーとしては、特別の委員会を設け、どんな問題が人びとを分裂させるのか、あるいは結びつけるのか、また、市民の権利義務としてあらゆる国で何が認められなければならないの

か、といったようなことを数年間にわたって研究し続けました。この研究は、これから先戦争が起こらないようにするために、ロータリアンがなさねばならないことに対し、それぞれが貢献できるように、十分な準備を整えておくよう、企てられたものなのです。

この10年間、アメリカ合衆国内の何百というロータリー・クラブで、2,000回にも及ぶ国際理解のための研究集会が開かれました。そして、アメリカ国内や外国から何百名という優れた講演者がクラブ所在の市町村に招かれ、200名から1,000名の聴衆を前にして、国際事情に関する現在の諸問題を提示して論じたのであります。これらの講演会に出席したものは、今日までに150万名に上っています。これは成人教育として立派な事業でした。しかもこの講演者たちには、延べ350万名に上る高校生の集まりでも、話してもらったのです。

こういう事情を考えれば、国際ロータリーに対して、1945年にサンフランシスコで開かれた「国際連合の組織づくりに関する会議」にコンサルタントおよび副コンサルタントを送るよう、アメリカ国務省から要請があったことは、別に驚くほどのことではありません。そして全部で11名のロータリアンが、コンサルタントあるいは副コンサルタントとして、この会議に奉仕したのです。記録によると、これらのロータリアンは、国連憲章をつくることをまかされた公式の各国代表の人たちの考え方に対し、非常に明確な貢献をしたようです。当時、アメリカ合衆国国務長官であったエドワード・R・ステューニアス2世は次のように書いています。

「国際ロータリーが、国連の会議にアメリカ合衆国代表団のコンサルタントとして参加するよう求められたことは、ロータリ

一という大きな組織に対する好意と尊敬のジェスチャーであるだけでなく、国と国との間の理解を進めるにあたって、ロータリーの会員がこれまでに果たし、またこれからも果たしてゆく実際的な役割を認めたことにほかならない。サンフランシスコでは、ロータリーの代表者が必要であったのである。そして皆さんがよくご承知のように、彼らは国連憲章そのものと、とりわけ経済社会理事会の規程づくりに、非常な貢献を行ったのである。」

そのほか、ロータリアンはまた、自分の国の代表として、したがってこの会議の活発な参加者としても姿を見せていました。この年の国際ロータリー会長であるイギリスのウルバーハンプトンのトマス・A・ワレン氏は次のようにいっています。

「サンフランシスコ会議における各国代表団の団長のうち7名と、そのほか二十何名かの代表がロータリアンであったという事実は、世界が私たちの使命をほんとうに必要としていたことの、具体的な証拠だったのである。親善のメッセージを何百万という高校生や成人たちに伝えた講演集会をはじめとして、講義、ラジオ番組、文献、炉辺談話グループ等々、ロータリーの大規模な国際理解のための計画は、世論に対し、きわめて明らかな影響を与えている」

イギリスの教育界でも高い地位にあるこの人から、このような評価を受けたことは、世界60カ国のロータリアンにとって、大いに心強いことでした。

トム・ワレン会長は、教育こそ国際間の困難な事態を、永久に解決できるものだと考えています。指導者がいかに有能で信頼できても、戦争を避けようとする彼ら指導者の大きな努力は、間違った知識を吹きこまれ、また感情的になっている一般市民によって、挫折させられることがしばしばあるので、唯一の安全なやり方は、一般教育を最高のレベルまで上げてゆくことだと、彼は主張しています。

数学の鬼才といわれた世界一流の電気工学者である故チャールズ・スタインメッツ博士は、ラジオ、航空、送電などの諸研究のなかで、どのような研究が人類をもっとも益すると思うかと、ロジャー・バブソン氏にきかれたとき、人類の将来は、現実になされる発明ではなくて、人間発展の力である精神の力にあると、答えたということです。彼はさらに言葉をついで、物質的なものは幸福をもたらさないといい、人びとがこの事実をさとったときに、世界が一世代のうちに過去四世代分以上も進歩するであろうということをやっとわかるのではないか、といったのです。偉大な科学者によるこの言葉は途方もないいい方のようにみえるかもしれませんが、スタインメッツ氏は途方もない言葉は使わない人です。正確ということが彼のきわだった特性のひとつなのです。精神的な力というものは、何をなしとげることができるでしょうか。おそらく、戦争を避ける道を見出すことが可能になるかもしれません。永遠の平和への道を見出すのに比べたら、どんな発明でもそれほどの価値はないでしょう。

この世の初めから、優れた人たちは、ロータリーが「超我の奉仕」という言葉で要約した教えを、ずっと守り続けてきたことを言葉や行為ではっきりと示しています。これをみただけでも、ロータリーの示すゴールが到達できないなどと、どうしていえましょうか。

チェスタートン氏に感謝しよう。!

イギリスの作家、評論家であるギルバート・チェスタートン氏(1874—1936)が、現代のことを、彼が好きだったビクトリア朝時代と対照させて、「このビクトリア時代」という代わりに「このロータリアンの時代」といったことがあります。私たちロータリアンが、この気のきいた言いかえを聞いて、大笑いをしたあげくに、「ロータリーは、現代に必ず足跡を残すにちがいないと、世界中の人が信じていますよ」と言っても、罪にはならないでしょう。

ロータリーは秘密結社ではありませんし、儀式も典礼もないのですが、会員でない人には、ロータリーといっても漠然とした概念しかつかめないのは当然のことでしょう。しかし、概して人びとは、ロータリーのことをよく思い、ほめてくれます。自分が会員でなくとも、親類や友人にロータリアンをもっている人が多く、ロータリーの運動や目的についても聞いて知っているのです。

ロータリーは、立派な仕事をたくさんやったという実績によって、おそらくいちばんよく知られていると思います。ロータリー・クラブやロータリアン個人が組織したボーイズ・クラブをはじめ、バンドやキャンプの類は数えきれないほどです。どこかで立派な努力がなされたということがあると、それがどんな種類のものでも、ロー

タリアンがその原動力になっている例がほとんどなのです。ある都市では、教育委員会の委員が全部ロータリアンで占められています。オハイオ州エライリアのロータリアン、エドガー・アレンの場合は、彼の献身的な努力によって、アメリカの40の州で、身体障害児童を助ける協会が組織され、障害をもつ子供たちの世話、治療、教育のために新しい法律が通過しました。この事業はヨーロッパにまで広げられ、海外でも二度の大会が開かれましたが、その出席者のほとんどがロータリアンでした。苦しんでいる何千という子供たちが、この人道的な仕事によって恩恵を受けているのです。

ロータリー・クラブの会合で、会員たちは、教育者、ボーイスカウトの幹部、救世軍やYMCAの役員、活発な福祉機関の代表者、といった人びとと知りあいになります。このことはそれぞれの団体のためにもなりますが、ロータリアン個人個人のためにもなるわけです。ロータリーは、社会生活のさまざまな事情を教える大人の学校だといってもよいのです。

ほとんどの大学や高校から教職員の代表が、地元のロータリー・クラブに会員として出ています。実業家たちも、このような接触を通して、高等教育の学校やその教育について知ることができるわけです。ロータリーが網の目のように細かいところまで入りこんでいる有様は、想像を絶するほどです。近代生活のほとんどあらゆる面が影響を受けるとともに、会員の視野はますます広がってゆくわけです。人生の味わいを深くするおだやかな親睦の影響が、すべてに広がっているのです。ロータリアンが、自分が会員であることに価値を見出している理由はたくさんありますが、ここに述べたのは、そのうちのほんの2、3にすぎません。

ロータリーのなかにあるもの、それは善行だけではありません。善行というのは、その下にかくされた何ものかが外に姿を現わしたにすぎないのです。この世界でもっとも強い力のなかには、目に見えないものもあります。人間には電気はもちろん見えませんが、これが工業の機械を動かしているのです。引力も目に見えませんが、ナイアガラのあの力強い大瀑布は、この引力の法則によって存在しているのです。私たちの呼吸する空気にせよ、目には見えませんが、私たちの生命をささえてくれるのです。ロータリーの力も、目に見えないとはいうものの、数々の奇蹟を生み出しています。ロータリーのたくさんの善行のおかげにも、目に見えない力が働いているのです。それは善意の力であり、その善意の力によってロータリーは存在しているのです。友情は相手にとって福音となります。ロータリーの精神によって、私がニューイングランドの故郷で経験したような、古い形の友情や隣人愛の世界に、何千という人びとが生まれ変わっているのです。

ロータリーの考え方によると、ビジネスは人生の主要な部分ではありますが、人生のすべてではありません。自分のビジネスの分野だけにしか目が届かない人は、憐れむべき人たちであり、その分野のビジネスでどんな成功をおさめていようが、それだけではだめなのです。ロータリーがめざすのは実際的なものであり、ロータリーの哲学は健全な哲学で、人生を豊かにすることを望んでいるのです。

ロータリーは宗教ではなく、またその代用になるものでもありません。それは現代生活、とくにビジネスや国際間の関係に、宗教的な衝動をうまく働かせてゆくものなのです。私の生涯の間にも、ビ

ビジネスのやり方はとくに目だった変わり方をしてはいますが、ここにもロータリーの影響が強く感じられるわけです。

職業分類によって会員を選ぶというやり方は、ロータリーの運動に対して、その倫理的な理想を、社会に奉仕するあらゆる職業に属する会員以外の一般の人びとにまで、投げかける機会を与えることになります。したがって、ロータリアンのひとりひとりが、ロータリーの理想主義と自分の職業とを結ぶ輪の役をするわけです。また、自分と同じ職業に従事する他の一般の人たちに対して、その職業の最高の規準をつくり上げる仕事に協力してもらおうという、一風変わった責任も負うことになります。ロータリアンがこれまでに何百という同業組合を組織している事実は、彼らが自分たちのこの責任を、よりよく果たそうとするためなのです。

ロータリーは、各国間の理解を促進するための努力として、ロータリーの初期のころに試みて効果があつたやり方と同じ方法——相互に関心をもちながら仲よくつきあうという方法を強調しています。ビジネスと親善交流の両方を通して、国同士がお互いによくわかりあうようになればよいのです。初めのうちは、いらだたく思える相手の奇妙な習慣も、結局は面白い習慣だということになって、そのままねしてみたりして、かえって生活を豊かにしてくれる場合もしばしばあるのです。

形式ばったことやわざとらしいことは傍らにどけておいて、地位や身分に関係なく、人びとが同じ平面でつきあいをするロータリー独特の雰囲気の中かで、友情はますますのびてゆきます。他の多くの国でもそうですが、アメリカのロータリー・クラブでは、仲間の会員と挨拶する場合にファーストネームを使うことが、強制ではあ

りませんが習慣になっています。ごくしぜんにできる人もありますが、この習慣に慣れるのに時間のかかる人もあります。しかし、この習慣にあわせられない人はほとんどいません。

ロータリーの正会員でもあるオーストラリアのある著名な市民が、イギリス国王からセントマイケル・セントジョージ第2等級勲爵士という、たいへん高い爵位を授けられたことがあります。これによって彼は、セントマイケル・セントジョージ第2等級勲爵士ジョージ・ファウルズ卿ということになったのですが、仲間のロータリアンから、これからどう呼んだらよいかときかれて、「いままでどおり、ただジョージと呼んでくれよ」と答えたのでした。

個人であれ、セクトであれ、派閥であれ、あるいは国家であれ、お互いに相手を憎んだり軽蔑したりする場合、憎しみの相手をただ知らないだけだということがあります。要するに無知が根底にあるのです。無知こそ平和にとっての脅威なのです。他のことがみな同じだとしたら、知的水準が高ければ高いほど、相手にお節介をしたり、批判したり、いばり散らしたりすることが少なくなるものです。個人にせよ、国家にせよ、知性をつけるのは、自分自身と世界に対する義務であるはずです。

異なった人種のグループや違う宗教の教えに帰依する人びとの間に、より良い理解を促進しようというロータリーのプログラムは、1905年にごく簡単に、しかしたいへん上手に始められたものですが、これまでのところ、外交官の交渉よりもはるかに大きな成功をおさめています。会員たちが一致していない事柄よりも一致している事柄に考えを集中するというのが、ロータリーのやり方です。友情というものは、国家や宗教の境界線をきわめて容易に乗り越えるもの

であるという事実を、ロータリーは十分に証明しているのです。

孤立するととかく優越感を抱くようになり、優越感をもつと、いろいろ面倒なことの原因となります。優越を永遠に続けるということは、歴史上どの国家もなし得なかったことです。上昇すれば必ず下降するものです。ある時代にほかのあらゆる国家に優越した国は、次の時代には別の国家によって消滅させられます。強い国力そのものが、結局はその国の弱点であるということなのです。熟年のあとには老年が、成熟のあとには腐敗がやってきます。これは自然の法則であって、取り消すことも、押さえつけて中止させることもできません。

鷲を鳴かせ、ライオンをほえさせ、熊をうならせる人は、決して自分の国に奉仕しているではありません。奉仕する気があるどころか、実は自分自身に奉仕しようとしているだけであって、国に対しては奉仕の反対で、むしろ害を与えているわけです。しかし、もっとひどいものもあります。この種の人たちは、外国を旅行しているときに、自分が忠節をつくさなければならない祖国に対して偉そうにかまえ、共感し賞賛する人たちに対して、わざとその弱点をさらけ出してみせるのです。

私はアメリカ人であり、この事実に対しては、何も言い訳をすることはありません。他の人たちに対しても、彼らが忠節をつくすべき祖国に、大声で忠節を表明するのは当然の権利だと思います。それがどこの国であっても、自分の国に不忠である人は、私はいささかも尊敬しません。人は自分の国を十分に愛し、自国に対して決して敵をつくらないようにするとともに、自分の国をいたずらに「理想の国」とであると主張したりして、自分の同胞を嘲笑にさらすよう

なことはすべきではありません。そんなことをすれば、自分の無知を明らかにするだけになるでしょう。しかし相手を侮辱するのは、友情をかちうる手段としても最低です。他の人たちの尊敬をかちうるいちばんよい方法は、礼儀作法の簡単なルールを守ることです。もしそれで望む結果が得られなければ、何をしてもだめでしょう。

50名か100名の会員しかいないクラブが、たとえ小さい都市でも、都市全体の性格にまで影響を与えることが、ほんとうにできるのでしょうか。ロータリー・クラブがその所在都市の性格に、ほんとうに影響を与えているということは、すでにはっきりと証明されています。当然のことですが、この影響は小さい町の場合に顕著なのです。アメリカの小説家シンクレア・ルイス（1885—1951）の有名な小説『本町通り』^{メイン・ストリート}（1920）の舞台になっている田舎町のような、意気阻喪した元気がない町が、息を吹き返して元気になっている例が多数あります。公共精神に乏しく、住民が他人の悪口やうわさ話にふけているような小さな町では、生活がほんとうに単調になってしまうものです。ですから、小さい町では、精神さえ理想的な形でしっかりしていれば、生活を最高のものにすることが可能です。

ある小さな町のクラブのロータリアンは、「ロータリーができたことによって、驚くほどの変化が起こり、争いごとやささいな嫉妬心は、公共のことを考える気持ちや熱心な協力活動などに、席を譲ってしまった」と、深い感慨をこめて語っています。

ウィリアム・ハワード・タフト氏がアメリカ合衆国大統領であったときに、彼の健康管理の責任者であったチャールズ・E・パーカー博士は、アメリカの小さな町の表情は、ロータリーやそのあとに続いた類似の組織によって、すっかり変えられてしまったとはっき

り述べています。バーカー博士は、小さい町を何千となく訪ねていきますから、どこがどうなったということをちゃんと知っているのです。協力活動ということが、小さな町の楽しい生活の土台としてあるということです。

ロータリーの影響力はインターシティ・ミーティングを通して、都市間に関係にも及ぶことがしばしばあります。隣接する都市同士の代表的な実業家がこの種の会合を開いて、両者の間の対立関係を抑え、協力的な精神を生み出したことがしばしばありました。インターシティ・ミーティングは、大都市の場合も小都市の場合も、長年にわたってロータリーの特色のひとつになっています。

インターシティ・ミーティングにはしばしば、25ないし30もの近隣都市のクラブの代表者が出席します。地区大会では100にのぼる都市からの代表者が一堂に会しますが、国際大会となると、50以上の国家からの出席者が集まります。ロータリアンは、自分の国のなかを旅行しているときでも、外国を旅行しているときでも、可能なかぎりロータリー・クラブの会合に出席します。公式名簿を見れば、どのクラブの例会が、どこで、いつ、開かれるかわかります。大都市のクラブの例会には他クラブから大勢のビジターが出席し、特に丁重に接遇されています。

ロータリーは、利害が相反する場合に、これをどう和解させるかについて、特別な研究を行い、対立する双方を親睦の雰囲気の中かにいぎなうという簡単な方法で、驚くべき成果を生み出してきました。敵意の炎が燃えたり、くすぶったりしているところにこそ、ロータリーの出番があるわけです。町の農業関係の人たちがビジネス方面の人たちに対する信頼を失ったという場合には、まず実業家の

ほうがホスト役になって農民を招くのです。歌や演芸のほかに、齒に衣きせぬ率直な話しあいをやれば、そこからお互いに十分な知識を得て、よりよい理解に到達するというわけです。

ロータリーは、大都市においてさえも、かなりはっきりした影響力をもっています。大都市の生活に慣れているものには、教会、商業会議所、社交のクラブ、団体の支部、ゴルフ・クラブ、同業組合、学校、その他人間の集まる場所ならどこでも、ロータリーの親睦が及ぼしている影響をみてとることができます。

ロータリーの活動は、公共および個人の奉仕のひろい範囲に及んでいます。会員は、自分の特別な趣味や能力によって、その活動を選ぶこともできます。正式に認められている活動のすべてに首をつっこめる多芸多能な会員は、比較的少ないのです。多芸多能なロータリアンというのは、彼の住む町の資産であるといってもよく、まさに貴重な存在なのです。こういう人たちのなかから指導者が選ばれることになります。

どんなことでもこなせるロータリアンは、普通ロータリーの「四つの綱領」として知られているものに関心をもっています。それは次の四つです。

1. クラブ奉仕——自分の属するクラブの運営に関するもの
2. 職業奉仕——自分の実業、専門職業の倫理的なあり方に関するもの
3. 社会奉仕——自分の住む地域社会の福祉に関するもの
4. 国際奉仕——国際間の友好と理解の増進に関するもの

多くのロータリアン、とくにブラジルのロータリアンは、綱領は現実的にはたったひとつだと主張しています。それは、人生におい

て私たちの向上をうながす、もっとも適切な力として「奉仕」という考えを、もっと推進することだということです。私たちがここで四つの綱領と名づけているのは、この唯一の目的を達成させる手段であると考えerわけです。チェス・ペリーは、「奉仕」というものはロータリーのスーパーハイウェイであり、四つの主要な活動は、そのハイウェイを構成する4本の車線であると考えています。

全員の意見が一致することなどは到底望めません。25万人のロータリアンのなかで、ロータリーがみずからの力をもっともよく活用してゆく方法について、あなたと完全に同じ意見を持つ者は1人としていないと思います。人びとの考えがそれぞれに違うのは、各人の容貌が同じでないのと同様なのです。考えの違いは色あいの違いよりもはるかに変化に富んでいて、また変えにくいものなのです。人が何を信ずるかは、気質、遺伝、環境、経験など、いろいろな力によってきまるのであり、また指導者は、自分の判断を忍耐と自制をもって、練り上げてゆかねばなりません。独断でものをきめるロータリーでは、役に立つはずはないのです。

ロータリーでの交流から得られるどんなささやかな恩恵でも、立派な価値をもつものだという考えは、この運動につくす人たちの満足感の源となっています。要請されているとおりに、ロータリー・クラブの会合にきちんと出席する人は、この友好的な交流接触によって自分の人生が豊かなものとなり、自分の心理的、道徳的なもの見方がロータリーの文化的なプログラムによって改善されていく有様に、必ず気がつくはずであります。

ロータリーが今日のようなところまで拡大してきたのは、まさに組織発展のロマンスです。程度の違いはあっても、70の国々がその

恩恵を経験しています。これまでになされたすばらしい進展は、ロータリーの歴史が長い限られた国々のロータリアンの努力の賜ものなのです。他の国々からみれば、その推進力は国境の外からきているわけです。今日、ロータリーがアメリカ合衆国、イギリス、カナダの3国に深く根を張ったように、あらゆる国々に根を張ったあかつきには、その業績達成を測る尺度は何になるでしょうか。

ロータリーとそれにならってつくられた無数の他の組織は、社会のいろいろな運動を研究する人たちによって、現代のもっとも注目すべき発展のひとつと考えられています。そして、こういう現代のことを、チェスタートン氏はおどけて「このロータリアンの時代」と呼んだわけなのです。

やがて時がたち、私はバーモント、ニューハンプシャー両州のロータリアンに招かれて、故郷の谷間に二度めの訪問をしました。集まる人があまり多かったので、ウォリングフォードの公共の建物では収容しきれないことが、じきに明らかになりました。それではならじと、アメリカ農機具製造会社が援助に乗り出してくれました。

会合の当日は何十名という社員が集まり、工場の一部から重い機械類を建物の別の部分に移し、400以上の座席を入れ、夜がくるまでに、この奇蹟的な会場づくりの仕事をなしとげてしまいました。こうしてウォリングフォードは、前例のないほどの大集会を開く場所を、初めてもつことができたのでした。

その夜誕生するウォリングフォード・ロータリー・クラブを祝うべく、ロータリアンたちは、それぞれの役割を果たすために、両州の山や丘を越えて会場に集まってきました。

歓迎と親睦のスピーチが続き、新しいクラブの認証状が伝達され

ました。式が終わって、集まった人たちはしだいに解散してゆきました。楽しい気分の友人たちは、再び山や丘を越えて、それぞれの家路につきました。会場はもとの農機具工場に戻され、翌朝、教会の鐘はいつものように鳴って、人びとは仕事につきました。

こういった出来事は、わが谷間ではまさに前代未聞のことだったのです。私は自分が夢想家であることは認めますが、こんなに大勢の人が共通の理想にこたえて、あの谷間、この谷間から出てこようとは、ほんとうに夢にさえ見たことはなかったのです。

ニューイングランド地方の人たちは、生活習慣を簡単に変えることはありませんが、ゆっくりと考えたあげくが変わることを承知すると、今度はもとに戻ることはめったにないのです。

ロータリーの理解と親善を拡めるために、ロータリアンをのせた自動車がニューイングランド地方の山々をもものともせず走ってきたのと同じように、大西洋では大きな汽船が海に橋をかけてしまいました。国際ロータリーが、エジンバラ、オステンド、ウィーン、ニースなどで大会を開いたとき、北アメリカのロータリアンとその家族をそれぞれその近くの港に運ぶために、大西洋を渡る大型客船の一大船隊が生まれたのです。これから先、飛行機がロータリーでどのような役割を果たすかについてはなんともわかりませんが、飛行機が国と国との間の理解と善意とを容易にし、促進することは、ここで予言できると思います。

今から10年後に国際ロータリーが大会を開くとき、世界各地から飛んでくる飛行機で、空はいっぱいになることでしょう。奉仕という共通の理想で結ばれた人びとのこのような集まりから、悪いものが出てくるはずはありません。分裂する力があまりにも強すぎるこ

の世界のなかで、ロータリーは統合と融和をめざす力なのです。ロータリーは平和な世界のひとつの縮図なのであり、諸国民が見習うべきひとつのモデルになっているのです。

ロータリーによって照らされた道に沿って、同じような「奉仕のクラブ」が次々と何十もつくられ、利他的な衝動をもつ同じような気持ちの何十万もの人たちを会員として集めています。そのほか、実業や専門職業に従事する女性たちの同じような組織もいくつかできています。

ロータリーや他の類似のクラブにとって、まだまだ発展拡大の余地があるし、タイプや性格の違う国際的な組織にとっても同じことがいえます。国際的な理解と善意を養なおうとするものであれば、どんな旗のもとに結集しようと、そんなことはかまわないのです。

私たちの5,000以上のクラブが存在する70カ国において、ロータリーが世論に与える影響は、多くの人が知っているよりも、はるかに大きいのです。世界の人口に比べると私たちの会員の数が少ないことはたしかですが、ロータリアン一般の性格と、彼らが占めている地位とが、私のいうことを裏付けてくれると思います。

第一に、ロータリアンはたいいていの国で立法機関の議員になっています。アメリカ合衆国の議会においても、下院議員にはロータリアンがたくさんいますし、上院にも数名います。トルーマン大統領の閣僚のふたりはロータリアンであり、ひとり国際ロータリーの会長を務めたことがあります。

アメリカ合衆国でもその他の国でも、新聞界はロータリーに広く会員を送っており、普通は社主自身が会員になっています。

何万人という教育者もロータリーに入っていますが、それによっ

て現代や次の世代の何百万という若者が、ロータリーの恩恵を受け、あるいは受けることは確実です。

ロータリアンはクラブに対し、驚くほどの忠誠心を示します。何名かの会員は30年以上にわたって例会完全出席の記録を保持し続けています。いやそれどころか、クラブ全体が連続100回以上も、例会全員出席記録を続けているところもあるくらいです。

どうしてロータリーに対してこのように愛情をもつのでしょうか。この愛情は、人間が自分の仲間のものに対して抱く愛情なのです。形式ばったことや教義をすべて脱ぎすてると、友情が第一となるわけです。ロータリーは政治や宗教で差別することはいっさいありません。イスラム教徒も、仏教徒も、キリスト教徒も、ユダヤ教徒も、仲よくいっしょに食事するのです。カースト制度に支配されたインドでも、ロータリーは他の国と同様に盛んです。ロータリーには転向とか改宗とかいうことはありません。論議のある問題に対して、会員はそれぞれ意見をいう権利を与えられています。ロータリーの舞台は、あらゆる種類とあらゆる地位の人をいれて余りあるほど広く、しかもそれぞれが他人の見解に寛容で、無私で、友好的でありうるようになっています。

ロータリーは友情という土台石の上に建てられたものであり、寛容の精神がロータリーを結びつける要素なのです。もしこの寛容の精神がなければ、ロータリー・クラブのひとつひとつがもっている原子力エネルギーはたいへんなものですから、それぞれのクラブはこなごなになってしまうでしょう。ロータリーを結びつけているのは、私の祖父が一生貫き通し、またそこから私の信念も飛び出してきたあの寛容の精神なのです。

事実、現代はロータリーの時代です。この運動が生まれて以来初めて、世界の列強が国際間の理解と親善の促進に、深い関心を示しています。これこそまさにロータリーの本質であります。列強諸国がお互いの欠点に寛容でありますように、また、私たちが長い間生きてきたこの世界は食うか食われるかの世界であることを忘れないように、神に祈るものであります。ジャングル時代を脱け出た私たちは、良心のとがめなしに、お互いに軽蔑の指をさすことはできません。ロータリーが、実業家と専門職業人の間に世界的な親睦をつくり上げるのを可能にしたこの寛容の精神をもってすれば、世の中に不可能なことはなくなるでしょう。

私と妻のジェーンは、ロータリーが私たちに多くの国の何千という人たちの友情をかちうる機会を与えてくれたこと、そしてまた、「地には平和を、人びとには善意を」という考えが夢に終わらず、平和こそ必ずくるという確信を抱く機会を与えてくれたことで、たいへん恵まれたと思っています。西暦1945年という年に生きて、この大きな目覚めを目撃するのはたいへんな特権です。「現代はロータリアンの時代である」という言葉をつくってくれたことに対し、ここでもう一度、ギルバート・チェスタートン氏にありがとうと申し上げたい。

カムリー・バンク

ある冬の日のこと、私はシカゴの郊外のロングウッド通りを歩いていました。道は、「尾根^{リッジ}」と呼ばれている丘をめぐるしていました。この丘は南西の方向に数マイルも延びていて、市の大部分が平らなところにあるシカゴとしてはめったにない景色でした。通りの西側に面した家々は、道に平行する丘の頂きに建てられていたわけです。

その日は丘が雪におおわれていたので、大勢の子供たちが、他人の土地所有権など知っちゃいないとばかり、滑べるのに夢中でした。しかしどの地主さんたちも、自分のところの芝生に入りこんで、わがもの顔に滑る子供たちのことを、とやかくいう気配はまったくないようでした。

こういう光景は、私にとってとてもなつかしいニューイングランドの生活にそっくりだったので、もし自分の家をもつことになったら、このロングウッド通りの丘の上に建ててみようかと思ったほどでした。ところが、意外に早くその時期がやってきました。シカゴ・ブレイリー・クラブで田舎へハイキングに出かけたときのこと、かわいらしいスコットランド生まれの娘さんと知り合いになりました。彼女は、私の上衣がほころびているのを見て、繕ってあげようといってくれたのです。これが彼女にとっては運のつきだったわけ

で、その後まもなく、私はジェーン・トムソンをくどいて、ポール・ハリス夫人にしてしまいました。

かわいいジェーンと結婚したのは1910年でしたが、その2年後、この丘の上に家を手に入れました。この家を私たちは、ジェーンが少女時代を過ごしたエジンバラの通りの名をとって、「カムリー・バンク」と名づけましたが、そのあと私たちがこの家を所有していた三十何年かの間は、積雪の時期が来ると、どこの家の子供たちも、私の家の芝生の斜面を自由に使って滑ることができたのです。

子供たちに使わせないということは、私にはどうしてもできませんでした。彼らはみんな、小さな悪漢なのですが！ しかし彼らの多くは、いま、遠く故国を離れた外地の、陸で、海で、空で、私たちのために戦ってくれているのです。わが家の美しい芝生で、暴れまわった悪漢たちに、神のご加護がありますように！

人口が増加するに伴って、シカゴという大都市がだんだん私たちの近くに迫ってきて、やがて何年かのうちに、その息吹を感じるができるほどになりました。しかしなんととってもまだ、郊外は郊外ということで、自動車で10分も出れば、もうイリノイの田園地帯というわけで、小麦やとうもろこしの畑、牧場、森林地帯などが、私たちに十分な解放感を与えてくれます。

私たちの家から前の通りをななめに横切ると、まだ結婚したのころには、野鳥の理想的な生息地があって、私たちはこれを大いに自慢していました。その一画は、野生のりんごの木がびっしり繁茂していて、しかもそれには長くて鋭いとげがついているため、鳥たちは犬や猫の心配をまったくしないですんでいました。かくれがととして、駒鳥がここをとくに利用していて、交尾期や巣づくりの間、

ずっとそこにとどまっていた。春になると何千羽もやってきて、しばらくそこをすみかとするので、あたりは彼らの歌声でいっぱいになってしまうのです。

　　こういう慧眼な鳥たちが、このような理想的な安全地帯を、どうして永久のすみかとして望ましいと思わなかったのか、私にはどうしてもわかりません。おそらく彼らはここを、人間たちが何か自分の用をたすために出かけて、用がすめばさっさと帰ってきてしまう、たとえばニューヨークのグランド・セントラル駅のような、一種の大きなコンコースだと考えたかったのかもしれませんが。正気な人間だったら誰だって、グランド・セントラル駅で、自分の家族を育てたいなどとは思わないでしょう。私の知るかぎりでは、このロングウッド通りのりんごの茂みのなかに、永久の巣をつくることを考えた駒鳥は1羽もいなかったのです。私の想像では、駒鳥たちはいずれ父となり母となるわけのものでありますから、未来の父鳥はここで未来の母鳥候補をしばらく眺めたのち、そのなかから良いのを選び、お眼鏡にかなったその相手と、遠いどこかで良い家庭をつくるために、狂ったように飛び交う仲間のむれを離れて、飛びたつたのではないかと思っています。

　　鳥たちが、自分の巣をつくる場所を探す遠征に飛び立ったあと、ある朝のこと、トラクターがやってきて、木を根こそぎに引き倒し、夕方までには1本も残さず、すっかり平らにしてしまいました。駒鳥が帰ってきて、留守中に行われたこの大略奪のあとを目撃したとき、彼らは気が狂ったようになりました。羽をバタバタさせながら鳴き叫ぶ声は、耳を聳するばかりでした。鳥の言葉がわかれば、彼らはきっとこんなふうに叫んでいたのではないのでしょうか。「泥棒!

泥棒！ あの強欲な人間どもは、われわれの家を荒らしただけでなく、みんなもっていってしまいやがった。こんなひどいことは聞いたこともない！」

そのときから90日たつと、かつては鳥の安全なすみかだったところに、アパートメントができて、500名の人間の住むところが完成したのです。建物はきれいですし、周囲もよく整備されています。しかし、私たちのプライバシーと田園生活の気分とは、どこかに飛んでいってしまいました。ところで、私たちはこの事態をなんとか切り抜けなければならないので、こう考えることにしました。500名もの人たちが都市の騒音と混雑から逃がられたことを考え、そして何十かの窓にきらめく灯りは、彼らなりの友愛を投げかけているのだとみれば、補いがつくというわけです。

妻と私は、「カムリー・バンク」をできるだけうまく使うように努力しました。世界各地からの幾十名ものロータリアンを、ときには八つもの別々の国からのお客をいっぺんに食事に招いて、もてなしたこともあります。こういうお客を記念して、私たちはたくさんの樹木を「友情の庭」に植えてきましたが、立派なお客さんたちが、とうにあの世に旅立たれて、木だけが友情のしるしとして残っている例もたくさんあります。

子供がない私たち夫婦は、国際ロータリーを養子にしたのです。「カムリー・バンク」の喜びの盃は常に満ちあふれていましたが、悲しいことにも出会っています。市の偉い人たちが、ロングウッド通りにアーク灯をつけたのです。これで、神が夜のとぼりを星のピンでとめる必要はなくなってしまいました。中秋の名月を眺めて、収穫を祝うこともなくなりました。ここから通勤する人たちが、暗

いなかを手探りで歩いて、家庭の温かい、陽気な^{だんらん}団欒の炉辺にたどりつくということもなくなりました。こういったものはすべて、市の偉い人たちに取り上げられてしまったのです。夜は永遠に追放されてしまった、というのが私たちの実感です。

数回ほど、国際ロータリーの理事会から、私たちふたりに、外国のロータリー・クラブを訪れるよう招きを受けたことがあります。たいていの場合ありがたくお受けし、親善の大使として、大いに努めました。ロータリアンと彼らの国の政府の協力によって、私たちは五つの大陸だけでなく、いくつかの主要な大きな島の、公園や遊技場に友情の樹を植えました。私たちの植えた樹は国際間の理解と親善のシンボルでした。こういった植樹につきものの儀式には、その国の政府や市庁の人たちも参加しました。適切な語句を刻んだ銅板をはめこんだ記念碑が建てられたことも何回かありました。私たちの植樹は善意を身ぶりで示しているのにすぎませんが、どこの国の市民たちにも、その国の言葉が何語であっても、それはちゃんとわかってもらえるのです。

注一ポール・ハリスが旅行中に「友情の樹」を植えた都市は次のとおりです。

ベルリン（ドイツ）、ターリン（ラトビア）、ヘルシンキ（フィンランド）、ゲーテボリとストックホルム（スウェーデン）、ベルゲン（ノルウェー）、上海（中国）、東京（日本）、ブリスベン、キャンベラ、ホバート、ローンセストン、メルボルンおよびシドニー（オーストラリア）、オークランド、デューネディンおよびウェリントン（ニュージーランド）、メキシコ・シティ、パナマ・シティ、ボゴタ（コロンビア）、リマ

(ペルー)、サンチアゴとバルパライソ (チリー)、ブエノスアイレス (アルゼンチン)、モンテビデオ (ウルグアイ)、リオデジャネイロとサンパウロ (ブラジル)。

地球上の全住民のなかで、礼儀作法のワクを越えているという印象を受けた民族はありません。もちろん私たちのとは大いに違う場合もたくさんありますが、みんなそれぞれの正しい生き方の軌範をちゃんともっています。外国を自分自身の物差しで測ることを主張する旅行者は、物足りなさを見出すのが当然ですが、残念なことに自分たちの文明が規準となるものであり、それに外れるものはすべて間違っているとまで感ずる人たちもいます。

優越感は大いに平和を乱すものです。不幸にも、どこの国の国民にもこれがあるのです。旅行しているときに私たちは、土地の人たちがもっとも高く評価するものに強い関心をもつようにするとともに、はっきりと頼まれなにかぎり、彼らのやり方と私たちのやり方を比較したりしないようにしています。手短かにいうと、私たちは、旅行先の国では、みにくいものは見ないで、美しいものだけ探そうと努めるわけです。このやり方は、これまでたいへんうまくいっていると思います。

私たちのように、おかげで多くの国の人びとの生活のなかに入りこむ特典をもったものは、どこの国でも、その国を憎むという気持ちにはなかなかありません。私にとっては、憎しみというのは危険な武器であり、戦争のときにも、平和のときにも、なんの役にも立ちませんし、必要でもありません。キリスト教はちゃんと道を示しています。人びとが感情や憎しみに左右されるようになるのは、キ

リスト教を裏切ることなのです。

長い旅を終えて帰ってくると、やはりうれしいものですが、自分の国に対する愛情は、出かける前よりも一層強くなっています。アメリカはすでに多くのことを成しとげましたし、しかも前途はなお洋々たるものです。しかも、私の愛情はもはや盲目的ではなくなっています。多くの国の人びとと接触したことによって、理性的になったからです。今では、私の国を愛しているだけではなく、なぜ愛するか、その理由もわかっているのです。私が自分の国を愛するのは、それが掲げている理想の故であり、教育に対して熱情を示しているためであり、また、高い代価を払っても、喜んで自由を買おうとする国であるからなのです。

私の国の優れた点をこれ以上ならべる必要はありません。ここに挙げただけで、祖国に対する私のつきることのない敬意とゆるぎない忠節の念を、裏づけるのに十分だと思います。アメリカが、他の国々の及ばないくらい、数々の長所をもっているのだという私の確信は、私たちがこれまでにおかしてきた、また現におかしつつある、そしてこれからもおかし続けるであろう間違いを認める勇気を私に与えてくれるのです。

私の国が掲げる理想と、教育に対して示す熱情は、私がひとり悦に入ったり、容易に満足してしまったりすることが決してないように、私を刺激してくれますし、いやそれどころか、逆に、アメリカの運命を固く信じながら、より偉大なるものを常にめざすように、激励してくれるのです。

とはいえ私の愛国心は、私たちが現在、食うか食われるかの世界に生きていて、ときには私たちも略奪的であったことがあるという

事実には、目をつぶるものではありません。適者生存という原理は、ジャングル時代から残った残酷な教えであるようにみえます。まさにそのとおりですが、文明はこれに反対の叫びをあげて、私たちの戦^{いくさ}を解決する、よりよい方法を求めつつあります。偽善的なみせかけや感情をむき出しにすることによってではなく、むしろ、人間と人間のあらゆる関係に冷静な理性を働かせることによって、さらにまた、すべての人のために奉仕しようという真剣な願望を持ちつつけることによって、私たちは結局は成功すると思います。

私の国の非利己主義と理想主義は、この50年の間、全世界に明らかにされてきましたし、これからも、私たちはあらゆる危急の場面に処すべく立ち上がるであろうと思います。しかし、自分たちの前途にひそむ危険に目をつむってはならないのです。

私たちアメリカ人は英雄を崇拝します。ただ、崇拝すべき英雄私たちは賢明に選ぶほうがよいでしょう。アメリカ人が生産性という神をまつる社の前で礼拝をしているという事実は否定できないでしょう。望んでいるものが全部満足させられたとき、私たちは次に何をするのでしょうか。新しい品物を考え出して、それを生産するのでしょうか。自分らを高い生産性にあわせてしまった現在、そこから抜け出る道はおそらくないと思われます。人びとは仕事をもたねばなりません、それは生産を意味するわけです。卵をかきまわすのはすごく簡単ですが、これをもとどおりに戻すのは容易なことではありません。

生産ということに反対するわけには、もちろんまいりません。あまりにも可能性をもっているからです。自動車道が山を貫き、飛行機は空に橋をかけ、地球上の人たちがお互いをもっと理解しあえる

ようにしてくれました。理解が深まったその必然の結果として親善が増すのです。ときにはそうでないように見える場合もありますが。

高い生産性のために弁ずるとすれば、私たちと連合国とは、生産力が高かったからこそ、この間までの戦争に勝てたのです。アメリカには他のどの国よりも、たくさんの大学や病院がありますが、これらも生産性の結果なのです。また、戦争のあと苦しんでいる国全部の子供たちに食糧を与えようとするならば、高い生産性がなくて、どうしてそれができるでしょうか。

私の国が困難から抜け出す道を見出すのに、長く待つ必要はないと思います。というのは、もし私が何かなすべき必要のあることをみつけたとすると、ほかの、私よりももっと強く、もっと利己的でない人にも、もちろんそれがわかるからです。そうすると、アメリカ独特の不屈のやり方で、必ずやそれが満たされてゆくのです。

いまアメリカで必要とされているものは、機械に従属する哲学ではなく、健全な、賢い、人生の哲学なのです。私が国民にいちばん希望するところは、彼らが家庭を愛する、教養ゆたかな人間であることを、世界中に知ってもらうことなのです。

これまで伝道師や哲学者や詩人たちは、こういった、より良き人生の生き方について長い間教えてきましたし、私たちはそれを受け入れはするものの、実行が伴わなかったのです。しかし、ときには大実業家といわれる人たちでさえ、この教えの良いことがわかって、少数ながらそれを実行に移している人も出てきているのです。

ここに述べたことと、私の故郷のニューイングランドの谷間とどんな関係があるのでしょうか。私が言いたいのは「ロータリーは、私の少年時代のニューイングランドの人びとの特性であった寛容と善

意と奉仕の精神から生まれたものであり、私はその精神のうち、自分のなかにあるものを、すべて、自分なりに伝えようとしてきた」ということなのです。

本書『ポール・ハリス著『MY ROAD TO ROTARY 抜粋「ロータリーへの私の道」』の復刻にあたり、安部豊任バスターガバナー（1985-86年度ガバナー・甲府北ロータリークラブ・97歳）よりご指導ご助言をいただきました。

また国際ロータリーからの復刻許可取得については、ロータリーの友編集長・二神典子氏のお手を煩わせました。感謝申し上げます。

今回の復刻版の発行は当クラブの事業として行ったもので、いかなるクラブの本復刻を妨げる意図はありません。また本書は国際ロータリーが「第2版」として出版した本を原本とし、そのままをダイレクト製版・印刷したものです。

クラブ雑誌・情報委員会を中心に2013-14年度から準備し、2014-15年度初めにお手許にお届けできる運びとなりました。

本書を各位の座右の書として愛読くださることを願っています。

平成26年7月

国際ロータリー第2620地区 甲府北ロータリークラブ

2014.7.20/1,000



